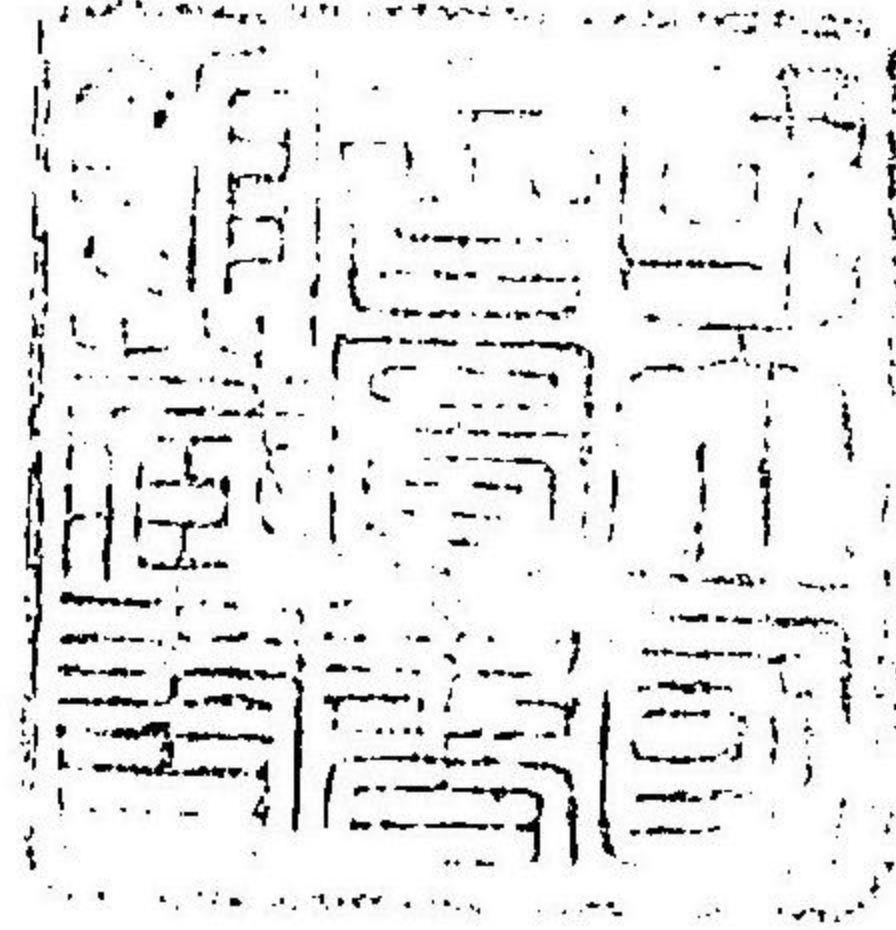


912.4

Ti.238.s2

心中天の網島  
源氏鳥帽五折

近松門左衛門作  
武蔵屋茶屋版



337105

7144 1:258

紙屋 治兵衛 天竺 綱島  
紀伊國屋 小春

近松門左衛門作

さん上じやうばつらふんごろのつころちよころふんごろで。まてとつころわつらもつくる  
 くく。誰たが笠かさとわんがらんがらす。空そらがくんぐるくも。れんげくればつらふん  
 ごろ。妓あが情なさけの底そこ深ふかきこれのや戀こひの大海たいかいと。替かへも干はされぬし岨み川がわ。思おもひくの思おもひ唄うた。心こころが  
 心留こころどむるは門行かどあん燈とうの文字もじが席せき。浮うかれ忽と行あんの仇淨あだぢやう瑠る璃り。役者やくしや物真ものまね似になや唄うた。二階にかい座敷ざしきの三  
 味線みせんに曳ひかれて立たちよる客きやくも有あり。紋日もんひ通とれて顔隠かほかくし仕過しすせじと忍しのび風かぜ。仲居なやのさよが是これと見  
 て三保みほの谷やが着きたりける。頭巾づんの鍔しころと取外とりはずし。二三度にさんど延のびたれ共思ともふ嫖客びやくなれば通とさ  
 じと。飛懸とびかり渾ひたり悪酒わるじゆ落お。ごんせと止とどまる女景清にやけいせい鍔づんと頭巾づん。ついふみ冠かぶる客きやくも有あり。橋はしの名  
 さへも梅櫻うめざくら花はなと揃そろへし其中そのなかに。南みなみの風呂ふろの浴衣ゆかたより今此新地いまこのしんちに戀衣こひころも。紀きの國くにやの小春こはるとは  
 此十月このとつきに仇あだし名なと世よに遺のこせとの光ひかりのや。今宵こゝろは誰たれの呼子よびこ鳥とり。覺おぼ束つかなくも行燈あんどうの影かげもさ違ちがふ  
 妓あの立歸たちかへり。ヤ小春こはる様さまの何なんといの互たがひに一坐いざも打絶うちたへ。貴面きめんならねば便たすも聞きず。氣色きしよくがわるい  
 の顔かほも細こまり窺うかがれさんした。誰たれやらが咄はなしで聞きば紙治かみぢ様さまもへ。内うちのら數度たんど客きやくの吟味ぎんみに遇あは

天の綱島

て。何處へもむぎと送りぬの。いや太兵衛様に請出され。在所とやら伊丹とやらへ往らんとすはつ共聞及ぶ。何様で御坐りやすと言ければ。ア、もう伊丹と云ふて下んすな。夫で痛入はいな。最惜なげに紙治様と私しが中。左程にもあいな事と。あの誇口の太兵衛が浮名と立て云散し。客といふ客は退果。内からは紙屋治兵衛故じやとせく程に。文の便も叶はぬやうに成やした。不思議に今宵は武士衆とて河庄方へ送らるゝが。斯往く道でも若し太兵衛めに逢ふると。氣遣さく敵持同前の身持。なんと其邊に見へぬのへ。チ、く夫ならちやつと外さんせ。あれ一丁目おらなまいだ坊主が。悪戯念佛申て来る其見物の中に。のんこに髪結て野良らしい。伊達衆自慢と云そな男。慥に太兵衛様のと見た。あれく爰へと。云ふ間程なく炮祿頭巾の青道心。墨の衣の環襷見物ぞめきに取巻れ。鉦の拍子も出合こんく。ほでこんく念佛に口噛交て。樊噲流は珍らしおらず。門と破るは日本の朝比奈流と見よやとて。貫木逆茂木引破り右龍虎左龍虎討取て。難なく過る月日の開や。なまみだなまいだく。迷ひ行共松山に似たる人なき浮世ぞと。泣つエ、くワハく。笑ふつ狂亂の身の果何と淺猿やと。芝と褥に伏けるは眼も當られぬ

風情。なまみだなまいだく。ぬい。紺屋の徳兵衛。房に原來濃染込の。内の身代灰汁でもはげす。なまみだなまいだく。ア、是坊様なんぞ。エ、思々しい漸々此頃此廓の心中沙汰が鎮つたに。夫ねいて國姓爺の道行念佛が所望じやと。杉が袖のら報謝の錢。たつた一錢二錢で三千餘里と隔てたる。大明國への長旅は。あはぬだ佛あひぬだく。ぶつ云ふて行過る。人立紛れにちよく走つと河内屋に駆込は。是はく早いお出お名さへ久しう云なんだ。やれ珍らしい小春様くはるくで小春様と主の花車が勇む聲。是門へ聞へる高い聲して小春くと云ふて下んすな表に否な李韜天が居るわいの。密のく頼みやすと云ふも洩てやぬつと入たる三人連。小春どの李韜天とはない名と付て被下た。先禮のら云ましょ。連衆内く咄した心中よし意氣方よし床よしの小春どの。頗て此男が女房に持の。紙屋治兵衛が請出する。張合の女郎近付に成て置やと跋扈よれば。エイ聞共ない得知れぬ人の仇名立。手柄にならば精出して云はんせ。此小春は聞共ないとついと退けば又摺寄。聞共なく共小判の響で聞せて見せう。貴さまもよい因果じや。天満大坂三郷に男も多いに。紙屋の治兵衛二人の子の親。女

房は徒弟同士始は伯母尊。六十日ノ間に問屋の仕切にさへ追る、商賈十貫目近い金出して請出すの根曳のとい。蟻螂が斧で御座る我ら女房子なければ。姑なし親もなし伯父持ず。身すがらの太兵衛と名とつた男。色廓で潜上云ふ事は治兵衛奴には叶はぬ共。金持た斗は太兵衛が勝た。金の方で押たらばなふ連衆。何に勝ふも知れまい。今宵の客も治兵衛奴とや賞と。此身すがらが賞ふた花車酒出しや。エ何かしやんす今宵の客はお武士衆。押付見へましよお前は何處ぞ他で遊んで下さんせと。云共はたへた顔付にて。ハテ刀指の指ぬの武士も町人も客は客。何程指ても五本六本は指まいし。よふ指て刀脇差たつた二本。武士ぐるめに小春殿賞ふた。扱つ隠つ成れても縁有ばこそお出合申すなまいだ坊主のね蔭。ア、念佛の功力有がたい。こちも念佛申すぞや鉦の火入煙管鐘木面白。ちやんくちやんく。紙屋の治兵衛小春狂ひが杉原紙で。一分小判紙塵々紙で。内の身代漉破紙の。鼻もなまれぬ。紙屑治兵衛。エなまみだ佛なまいだ。なまみだ佛なまいだ。と。暴亂旬く門の口人目と忍ぶ夜の編笠。ハア、塵紙わせた。ハアさつし忍びやう。何故這入ぬ塵紙。太兵衛が念佛怖くば南無編笠も賞ふた。引ずり

入れたる姿と見れば。大小撲素た武士の正具。編笠越にくつと睨たる。眞丸眼玉は敲鉦念共佛共出はこそ。ハア、と云共寝まぬ顔。なふ小春殿此方は町人刃差いた事なけれど。己が所に澤山な新銀の光りに。少々の刀も捻曲めふと思ふ物。塵紙屋奴が漆漉程な薄元手で。此身すがらと張合ふの慮外千万。櫻橋のら中町下り忽行いたら。何處ぞで紙屑蹂躪つてくりよ。皆おじやんと身振斗の男と磨く。町一ばいにはのつてこそ歸りけれ。所柄馬鹿者に構はず堪る武士の客。紙屋くと善悪の隣小春が身に應へ。思ひ頼れ恍惚と無挨拶なる折節。内ら走つて紀伊國屋の。杉が氣疎顔付にて。只今春様送つて参りし時。お客様まだ見ぬすなせ見届けて來なんだと。酷う叱られ升慮外ながら一寸と。編笠押上面体吟味。ム、夫でないく氣遣なし。跡詰てしうぱりと小春様。したがる樽の生醬油花車様さらば後に青菜の浸し物と。口合たらと立歸る。至極堅出の武士大さに無興し。こりや何じや。人の面と目利するの身と茶入茶碗にするの。翫れに來申さぬ。此方の屋敷の晝さへ出入のたく。一夜の他出る留守居へ断り帳に付。六の敷錠なれ共お名聞て戀慕ふお女郎。何様ぞと一坐と願ひ。小者も連ず先刻参つて宿と頼み。何でも一生の思ひ出お情

に預らふと存じたに。いゝな荒爾と笑顔も見せず。一言の挨拶もなく懷中で錢よじょうに扱々伏向て斗。首筋が痛の致さぬの何と花車殿茶屋へ来て産所の夜伽する事。竟にないづと證據ば。ね道理々曰と御存じない故御不審の立はづ。此女郎に紙治様と申す深いお客がござんして。今日も紙治様明日も紙治様と。他ら手指もならず外のお客の嵐の木の葉ではらくく。登り詰てのお客にも女郎にもなめて怪我の有物。第一勤めの妨とせく何處しも親方のならひ。夫故のお客の吟味自然と小春様もお氣の浮ぬの道理。お客も道理くくの中取て。主の身なれば御機嫌よのれが道理の肝腎肝文。サアはつと呑うけわさくわつさう頼升。小春様はる様と。云共何の返答も涙はるりの顔振上。あのお武士様同じ死ぬる道にも十夜の中に死んだ者。佛に成と云ひ升が定ひいな。夫と身が知る事の旦那坊主にお問なされ。眞に左様じゃ夫なら問たい事有自害すると首くゝるとい。必定此喉と切れたが澤山痛いでござんしよの。痛むの痛まぬの切て見す大方の事問つしやれ。ア、小氣味の悪い女郎とやと。流石の武士もうてぬ顔。エ、春様初對面のお客にわんまうな挨拶。些と氣と替とりや此方良人尋て來て酒にせふと。立出る門の宵月の影傾ふきて雲

のあし人足薄く成にけり。天満に年ふる千早振る神にわらぬ。紙様と世の罫口にのる斗。小春に深く大板麻の腐り合たる御注連繩。今、結ぶの神無月。せられて逢れぬ身と成果。あ、れ逢瀬の首尾あらば夫と二人が最期日と。名裂の文の云ひし毎夜くゝの死覺悟。魂抜てとぼく忙々身と焦す。煮賣屋で小春が沙汰武士客で河庄方と耳に入より。サア今宵と覗く格子の奥の間に。客の頭巾と願のいごく斗に聲聞へず。可愛や小春の燈に背向た顔のあの瘦た事い。心の中い皆已がこと爰に居ると吹込で。連て飛なら梅田の北野の。エ、知らせたい呼たいと。心で招く氣の前へ身空輝の脱殻の。格子に抱付わせり泣。奥の客が大吠。思ひの有女郎衆の御伽で氣がめいる。門も静な端の間へ出て行燈でも。見て氣と晴そふ。サアござれと連立出れば。南無三寶と。格子の小窓に肩身とすぼめ隠れて聞共内にしらす。なふ小春殿宵のらの素振詞の端に氣と付れば。花車が咄の紙治とやらと心中する心と見た違ふまい。死神付た耳へ異見も道理も入まじと思へ共。去どの愚痴のいたり先の男の無分別の恨ず。一家一門其方と恨み憎しみ。万人に死顔晒す身の恥。親の無のも知らぬ共もし有ば不孝の罰。佛の愚の地獄へも暖るに二人連で墮られぬ。痛

敷共笑止共一見ながら武士の役見殺しに成がたし。定て金づく五兩十兩の用に立ても助たし。神八幡侍冥利他言せまじ心底残さず打あけやと。嘸ば手と合せ。ア、忝けない有がたい馴染よしみもない私。御誓言での情のお詞涙がこぼれて忝けない。はんに色外に顯るでござんする。如何にも紙治様と死ぬる約束。親方にせられて逢せも絶指合有て今急に請出す事も叶はず。南の元の親方と爰とにまた五年有る年の中。人手に取れては私は素より主は猶一分立ず。いつと死で呉ぬ。ア、死にまじよと引にひのれぬ義理詰に風と言替し。首尾と見合せ相圖と定め扱て出やう扱て出よ。いつ何時と最期共其日送りの敢ない命。私一人と頼の母様。南邊に賃仕事して裏家住。死んだ跡では袖乞非人の飢死もなされふのと。是のみ悲さ私とても命は一つ。水臭女と思召も恥のしながら。其恥と捨て死に共ないが第一。死なずに事の濟やうに何様ぞく頼やすと。語れば點頭く思案貌。外にいはつと聞驚く思ひがけなき男。心。木のら落たる如くにて氣もせき狂ひ。扱は皆嘘の。エ、腹の立二年と云ふ物化された。根生腐りの狐め踏込で一討の面恥の、せて腹のよのと。齒切きりく口惜涙。内に小春が啣ち泣。卑怯な頼み事ながらお武士様の情。今年中

來春二三月の頃迄私しに逢ふて下んして。彼の男の死に來る度毎に邪魔に成て。期と延しく自のら手と切ば。先も殺さず私しも命助ある。何の因果に死ぬる契約した事ぞ。思へば口惜ふござんすと膝に凭れ泣く有様。ム、聞届けた思案有風も來る人を見ると。格子の障子ばたくと。立間治兵衛が氣も狂亂。エ、流石賣物安物め。奴性骨見違へ魂と奪はれし巾着切め。切ふの突ふのどふ障子に寫る二人の横貌。エ、打擲たい踏たい。何吐すやら點頭合拜む嘸く嘸るさま。胸と押へ摩つても堪へられぬ堪忍ならぬ。心もせきに關の孫六一尺七寸抜放し。格子の扱より小春が脇腹。爰ぞと見極めゑいと突に座は遠く。是はと斗り怪我もなく透さず客が飛のり。兩手と攫んでぐつと引入刀の下緒手ばしらく格子の柱にがんと搦み腕のと締付。小春騒ぐな覗くまいぞと。云ふ所に亭主夫婦立歸り是はと騒げば。ア、苦くない障子越に扱身と突込暴亂者腕と障子に括り置く思案有細解な。人立あれば所の騒ぎサア皆興へ。小春おじや往て寐やう。あいとい云へて見しり有脇差のつられぬ胸にはつと貫き。醉狂の余り色廓には有ならひ。沙汰なしに往なして遣らんしたら。ナア河庄さん私よさそうに思ひやそ。いゝなく身次第にして皆這入や。小春こちへと興の

間の影は見ゆれを縛られて。格子手がせに悶焦は締り。身は煩惱に繋る、犬に劣つた生恥  
 と。覺悟極めし血の涙しぼり泣こそ不便なれ。忽行戻りの身すがら太兵衛。扱こそ河庄が  
 格子に立たり治兵衛めな。投て呉んと襟のい櫻で引擔ぐ。わいた。わいたとい身怯者  
 のヤアこりや縛付けられた。扱の盜はざいたな。ヤ活掬賊め胴拘賊めとての磔と打擲。ヤ  
 頑盗めや鼻首めとては蹴飛のし。紙屋治兵衛盗して縛れたと叫り喚けば。行通ふ人邊近  
 所も駆集まる。内より武士飛で出盗人呼りの汝の治兵衛が何盗んだ。サア吐せと太兵衛と  
 搔搔み士にぎやつと令偃せ。起れば踏付踏のめしく引捕て。サア治兵衛踏で腹いよと。  
 足元に突付ると縛れながら頼車。踏付く踏さがされて土塗れ立上て睨まのし。四邊の奴  
 輩よふ見物して踏せたナア。一々に面見覺へた返報する覺へてとれと。へらず口にて逃  
 す立寄人々ぞつと笑ひ。踏れてもあの願橋のら投て水食せ遣なくと追駈行。人立すれば  
 武士立寄て縛めとき頭巾取たる面体。ヤア孫右衛門殿兄者人。アッア面目なやと。どうと  
 座し土に平伏泣ぬたる。扱の兄御様のいのと走り出る小春が胸ぐら取て引居へ。畜生め狐  
 め太兵衛より先うぬと踏たいと足と上れば孫右衛門。ヤイくく其愚鈍のら事起る。人

と賺すの遊女の商賣今日に見へたる。此孫右衛門の只た今一見にて女の心の底と見る。二年  
 余りの馴染の女心底見付ぬ狼狽者。小春と踏足で狼狽た自己が根生となせ踏ぬ。エ、是非  
 もなや弟とい云ひながら三十に押掛り。勘太郎おすると云ふ六歳と四歳の子の親。六間口  
 の家踏しめ身代潰る、辨別なく。兄の異見と請ることの眞は伯母。姑の伯母とや人親同  
 然女房おさんは我爲にも従弟。結合々重々の縁者親子中。一家一門參會にもおのれが曾  
 根崎通ひの悔みより外余の事の何もない。最愛の伯母者人連合五左衛門殿にべもなき昔  
 人。女房の甥子に倒され娘と捨ておさんと取返し。天満中に耻の、せんとこの腹立。伯母一  
 人の氣扱ひ敵に成味方に成。病に成程心と苦しめおのれが耻と包まる、恩しらす。此罰た  
 つた一ツでも行先に的が立。斯ての家も立まじ小春が心底見届。其上の二思案伯母の心も  
 安めたく。此亭主に工面しおのれが病の根元見届くる。女房子にも見變しん尤も。心中よ  
 しの女郎ア、お手柄結搦な弟と持。人にも知られし粉やの孫右衛門。祭の練衆の狂亂の覺  
 に差ぬ大小ぼつこみ。藏屋鋪の役人と小詰役者の眞似として。痴と盡した此刀捨所がな  
 いいやい。小腹が立やら可笑やら胸が痛い歯怒し。泣貌のくす皺面に。小春の始終陸

咽り皆知道理と斗にて。詞も涙にくれにけり大地と叩て治兵衛。誤つたく兄者人三年前よりあの古狸に見入れ。親子一門妻子迄でになし身代の手縛れも。小春と云ふ鑽倉賊に賺され後悔千万。ふつゝり心残りねば尤も足も踏込まじ。ヤイ狸め狐め鑽倉賊め思ひ切た證據は見よと肌につける守袋。月頭に一枚宛取換したる起請合せて廿九枚。戻せば戀も情もない是や受取と確と打付。兄者人彼奴が方の我等が起請數改ため請取て。貴方の方で火に熱て下され。サア兄貴へ渡せ。心得やしたと涙ながら投出す守袋。孫右衛門押開き。ひいふうみいよ廿九枚數揃ふ。外に通女の文是や何じやと開く所ぞア、そりや見せられぬ大事の文と。取付と押退け行燈にて上書見れば小春様参る紙屋内さんより。讀も果す左有ぬ顔にて懐中し。是小春最前は武士冥利今は粉やの孫右衛門商買冥利。女房限つて此文見せず我一人披見して。起請共に火に入る誓文に違ひない。ア、忝けない夫で私が立ますと又伏しづめば。ハアくくうぬが立の立ぬとは人がましい。是兄者人片時も彼奴が面見ともなし。いざ御座れ去ながら此無念口惜さ何様もたまらぬ今生の思ひ出女が面一ッ踏御免あれと。つゝと寄て治團太踏エ、く。しなしたり足おけ三年戀し床しも最愛

可愛も今日といふ今日只た。此足一本の暇乞と頼ぎいとほつたと蹴で。わつと泣出し兄弟連歸る姿もいたく敬。跡と見送り聲と上げ歎く小春も苛らしき。無心中の心中の眞の心の女房の其一筆の奥深く。誰文も見ぬ戀の道別れてこそは歸りけれ

中之卷

福德に天満神の名と直に天神橋と行通ふ所も神のお前町。營む業も紙店に紙屋治兵衛と名と付て。千早振程買に来るのみ正直商賣の所がらなり老舗なり。良人が巨燧に轉嫁と枕屏風で風ふせぐ。外に十夜の人通り見世と内と一締に女房おさんの心配り。日短のし夕飯時市の側迄使にいて。玉の何して居る事ぞ此三五郎めが戻らぬ事。風が冷たい二人の子供が寒のらふ。お末が乳の呑たい時分も知ぬ。阿房に何が成辛氣な奴ぢやと一人言。母様一人戻つたと走り歸る兄息子。ナ、勘太郎戻りやつたお末や三五郎の何とした。宮に遊んで乳香たいとお末のたんと泣やりました。左様こそくこりや手も足も釘になつた。父様の寐て御座る巨燧であつて暖まりや。此阿房めをふせふと待兼見世に駈出れば。三五郎只一人のらくとして立歸る。こりや愚鈍お末の何處に置て来た。ア、ほんに何



處でやら落してのけた。誰ぞ拾たのしらん迄。何處ぞ尋て來ませふの。おのれまわく大  
 事の子と怪我でも有たら擲殺すと。喚く所へ下女の玉お末と脊なのには。ねふく最愛や社  
 に泣て御座んした。三五郎守するならろくにしやと。喚き歸へれば。ナ、可愛やく乳香  
 たのらふのと。同じく巨燧に添乳して。是玉其阿房め覺へる程打擲しやくと云へば三五  
 郎掉頭。いやくたつた今お宮で密柑と二ツづ、食いせ。私も五ツ食ふたと。阿房の癖に  
 輕口だて苦笑するばありなり。ヤ阿房にのつて忘りよとした申さふさん様。西の方のら  
 粉やの孫右衛門様と。伯母御様伴立てお出なされます。是のく夫なら治兵衛殿起そのふ  
 。旦那殿起さしやんせ。母様と伯父様が伴れ立てござるげな。此短のい日に商人が晝中に  
 寐た振と見せてり又機嫌が悪うらふ。おつとまのせとむつくと起。算盤片手に帳引寄二一  
 天作の五くつちんがさつちん。六ちんがにつちん。七八五十六に成伯母打伴て孫右衛門内に  
 入ば。ヤ兄者人伯母様是のよふこそく先これへ。私の只今急な算用いたし掛り四九卅六  
 匁三六が一匁八分で二分の勘太郎よお末よ。婆く様叔父様お出じや煙草盆持ておまや。一  
 三が三夫おさんお茶上ましやと。口ばやなり。いやく茶も煙草も香には來ぬ。はおさん

このに年若とて二人の子の親。結構な斗りみめでない。男の性の悪いの皆女房の油断の  
 ら。身代破り夫婦別れする時は男ばりのの耻じやない。ちと目とあいて氣に張と持やいの  
 と云へば。伯母様愚など。此兄とさへ欺す不覺悟者女房の異見なを暖うに。ヤイ治兵衛此  
 孫右衛門とぬくくと欺し。起請迄のやして見せ十日も立ぬになんじや請出す。エ、汝の  
 ナア小春が借錢の算用の置われと。算盤押取庭へ瓦落理と投捨たり。是の近頃迷惑千万。  
 先度より後今橋の問屋へ二度。天神様へ壹度ならでの敷居より外出ぬ私。請出す事は扱置  
 思ひ出しも出すにこそ。云やんなく夕部十夜の念佛に講中の物語。曾根崎の茶屋紀伊國  
 屋の小春といふ白人に。天満の深い大盡が外の客と追退。直に其大盡が今日明日に受出す  
 との是ぎた。賣買高い世の中でも金と愚鈍の澤山なといろくの評判。此方の親父五左衛  
 門殿常々名と聞ぬいて。紀伊國屋の小春に天満の大盡といひ治兵衛めに極つた。噂の爲にの甥  
 なれど此方の他人娘が大事。茶屋者請出し女房の茶屋へ賣あらふ。着類着そげに疵付られぬ  
 間に取返してくれふと。沓脱半分下りられしとなふ騒々敷神妙も成と。明さ聞さ聞屈  
 て上のとと押宥め。此孫右衛門同道した。孫右衛門の咄しに今日昨日の治兵衛でない

會根崎の手も切れ本人間のふ々と聞ば跡のらはみあへるそもいなる病ぞや。其方の父親の伯母が兄最愛や光譽道清往生の枕と上。尊なり甥なり治兵衛がと頼むとの一言の忘ねど。其方の心一ツにて頼まれし効もないのいと。岸波伏て恨泣治兵衛手とうち。ハア、よめたく取沙汰の有小春の小春なれど。請出大盡大さに相違兄貴も御存。先日暴亂で踏れた身すがらの太兵衛。妻子眷屬持ぬ奴金に在所伊丹のら取寄る。とつくに彼奴めが受出すと私に押へられ。此度時節到来と受出すに極つた。我ら存知も寄らぬ事と云ばおさんも色と直し。假令私が佛でも男が茶屋者請出す。其最負せふ筈がない是斗りの此方の人に微塵も吁詐ない。母様證據に私が立ますと。夫婦の詞割符も合さては左様のと手と打て伯母の心と安めしが。ム、物には念と入うこと先々婚敷とて心に心落付ため。あたむぐるの親父殿疑がひの念なきやうに誓紙書すが合點の。何が扱千枚でも仕らふ。いよく満足則ち道にて求めしと孫右衛門懐中より。熊野の午王の村鳥比翼の誓紙引のへ。今日天罰起請文小春に縁切思ひ切。偽り申すにいての上の梵天帝釋下の四大の文言に。佛前へ神前へ紙屋治兵衛名としつゝのり血判とすへて差出す。ア、母様伯父様のお蔭で私も心落付

。子中なしても竟に見ぬ堅め事皆喜悅んで下さんせ。チ尤々此氣に成ば堅まる商事も繁昌しよ。一門中が世話のくも皆治兵衛為よられ。兄弟の孫共可愛さ。孫右衛門おじや早ふ歸つて親父に安堵させたい。世間がひへる子供に風ひのしやんな。是も十夜の如來のお蔭是のら成共お禮念佛。南無阿彌陀佛と立歸る心ぞ直に佛なる。門送りさへそこく敷居も越や越ぬ中。巨燧に治兵衛又ころり被る蒲團の格子編。また會根崎と忘すのと呆れながら立寄て蒲團と取て引退れば、枕につたふ涙の滌身も淨はりのり泣るたる。引起し引立巨燧の檣につき居顔つくく打詠め。あんまりじや治兵衛殿。夫程名残惜くば誓紙書ぬがよいのいの。一昨年の十月中の亥の子に巨燧明た祝義とて。まあ愛で枕並べて此のた女房の懷中に鬼が住ら蛇が住る。二年と云ふ物巢守にして漸々母様伯父様のお蔭で。睦じい夫婦らしい寝物語もせふ物と。樂む間もなく真に酷いつれない左程心残らば泣しやんせ。其涙が靦川へ流れて小春の涙で香やらふぞ。エ、曲もない恨めしやと。膝に抱付身と投伏口説たてゝぞ歎さける。治兵衛眼と押拭ひ悲しい涙の目より出。無念涙は耳のら成共出るならば云すと心も見すへきに。同じ目より溢るゝ涙の色の變らねば。心の見へぬの尤もく

人の皮着た畜生女が名残も絲瓜もなん共ない。意恨有身すがらの太兵衛金は自由妻子はなし。請出す工面しつれ共其時迄の小春めが太兵衛が心に随はず。少も氣遣なされな假令こなさんと縁切れ添れぬ身に成たり共。太兵衛めに請出されぬ若し金せきで親方より遣るならば物の見事に死んで見しよと。度々詞と放ちしが是見やのいて十日も立ぬうち太兵衛めに請出さるゝ腐れ女の四足めに。心の夢く残りぬ共。太兵衛めが隠言吐治兵衛身代息盡ての金に手詰つてなんど。大坂中と觸廻り問屋中の突合にも。面とまふられ生恥るゝ胸が裂る身が燃る。エ、口惜い無念な熱い涙血の涙。ねばい涙と打越へ熱鉄の涙が溢るゝとどろと伏て泣ければ。はつとおさんが興さめ顔。ヤア夫なれば最愛や小春の死にやるぞや。ハテサテなんぼ利發でも流石町の女房じやの。あの無心中者なんの死なふ。灸とすへ藥香で命の養生するいの。いや左様でない私が一生云ふまいとは思へ共。隠し包でむざく殺す其罪も怖ろしく。大事の事と打明る小春殿に無心中芥子程もなけれ共。二人の手と切せし此さんが機關。こなさんが淨々と死ぬる氣色も見へし故。あまり悲さ女は相見互ひ事切れぬ所と思ひ切良人の命と。頼むくとの口説た文と感じ。身にも命にも

のへぬ大事の殿なれど。引れぬ義理合思ひ切との返事私や是守に身とはなさぬ。是程な賢女がこなさんと契約違へ。おめく太兵衛に添ふもの。女子の我人一むきに思ひ返しのないもの死にやるいのく。ア、ア、瓢な事サアサア何卒助てくと。騒げば良人も敗亡し。取返した起請の中しらぬ女の文一通兄貴の手へ渡りし。おぬしおらいいた文な。夫なれば此小春死ぬるぞ。ア、悲しや此人と殺して。女どしの義理立ぬまづこなさん早ふ行て何卒殺て下さるなと。夫に絶り泣沈む。夫とても何とせん半金も手附と打撃とめて見る斗り。小春が命の新銀七百五十匁香さねば此世に止むる事成ず。今の治兵衛が四ツ三貫匁の才覺。打みしやいでも何處から出る。なふ仰山な夫で濟ばいと安しと。立て簞笥の小抽匣明て惜氣もないませの。紐付袋押開き投出す一包治兵衛取上げ。ヤ金の然も新銀四百目こりや何様してと。我置ぬ金に目覺る斗りなり。其金の出所も跡で語れば知れると。此十七日岩國の紙の仕切銀に才覺したれ共。夫の兄御と談合して商賣の尾の見せぬ。小春の方の急なとそこに四の一貫六百匁と。ま一貫四百匁と大抽匣の鎖明けて簞笥とひらりと飛八丈。京締緋の明日のない良人の命し茶うら。娘のお末が兩面の紅絹の小袖に

身と焦す。是と曲てり勘太郎が手も綿もない袖なしの。羽織も交て郡内の仕末して着ぬ淺黄裏。黒羽二重の一張裏定紋丸に鶯の葉の。のきも退れもせぬ中の内裸でも外錦。男鏝の小袖迄さらへて物數十五色。内端に取て新銀三百五十匁よもや貸ぬと云と。無い物迄も有顔に良人の耻と我義理と。一ツに包む風呂敷の中に情と籠にける。私や子供何着いでも男の世間が大事。請出して小春も助け太兵衛とやらに一分立て見せて下さんせと。云へ共始終差俯向しく泣て居たりしが。手附渡して取とめ請出して其後。圍ておくの内へ入るにしてあら。其方何と成とぞと云れていつと行當り。アツア左様じや。ハテ何とせよ子供の乳母の飯焚の。隠居成共しませふとわつと叫び伏沈む。余りに冥加恐敷此治兵衛に親の罰天の罰佛神の罰の當らず共。女房の罰一ツでも將來のよふない咎免してたもれと。手と合せ口説欺けば。勿体ない夫と拜むといの手足の瓜と剝しても。皆良人の奉公紙問屋の仕切銀。何時のらの着類と質に間とわたし。私が箆筒の皆明敷夫惜い共思ふにこそ。何云ふても跡へんで返らぬ。サア〜早ふ小袖も着るへて完爾り笑ふて。往のしやんせと。下に郡内黒羽二重縞の羽織に沙綾の帯。金拵らへの中脇差今宵小春が血に染

との佛や知召さるらん。三五郎爰へと風呂敷包肩に負せて供につれ。銀も肌身にしつると付立出る門の口。治兵衛は内にお居やるのと毛頭巾取て入と見れば。南無三寶具五左衛門。是の扱折も折よふお歸り被成たと夫婦の顛倒狼狽る。三五郎が負ふたる風呂敷振ぎ取てどつのと居り尖り聲。女郎下にけつららふ。鐘殿是の珍らしい上下着飾り脇差羽織天晴よの衆の金遣ひ。紙屋との見ぬ新地へのお出の御精が出ます。内の女房いらぬ物おさんに暇遣や伴に來たと。口に針有苦い顔。治兵衛は兎角の言句も出ず。爺様今日の寒いによふ歩行しやんす。先お茶一ツと茶碗としほに立寄つて。主の新地通ひも最前母様孫右衛門様お出なされて。段々の御異見熱い涙と流し。誓紙と書ての發起心。母様に渡されしがまだ御覽被成ぬの。ナ、誓紙との此とかと懐中より取出し。阿房狂ひする者の起請誓紙の方々先々書出し程書ちらす。合點が往のぬと思ひ〜來れば案の如く。此態でも梵天帝釋の此手間で去狀書と。寸々に引さいて投捨たり。夫婦のあつと顔見合呆れて詞もなかりしが。治兵衛手をつき頭とさげ。御立腹の段尤も共れ詫すの以前の。今日の只今より何事も慈悲と思召し。おさんに添せて下されのし。譬は治兵衛を食非人の身と成。諸人のはしの

余りにて身命の繋ぐ共。おさんの急度上に居愛め見せず幸いめさせず。添ねばならぬ大恩  
 有其譯の月日も立私の勤方身上持直し。お目に懸れば知るゝと夫迄の目と塞いでおさ  
 んに添せて給ひれと。はらく溢す血の涙壘に喰付詫ければ。非人の女房に猶ならぬ  
 去状書く。おさんが持參の道具衣類數改めて封つけんと。立寄は女房あはて着物の數の  
 揃ふて有。改むるに及ばぬと駈塞がれば。突退ぐつと引出し。コリヤとふじや又引出して  
 もちんがらり有たけこたけ。引出しても。繼切れ一尺あらばこそ葛籠長持衣裳櫃。是程の  
 らに成つたると舅の怒の眼玉も居り。夫婦が心の今更に明けて悔敷浦島の。巨燈浦團に身  
 と寄せて火にも入たき風情なり。此風呂敷も氣遣と引解き取散し。さればこそく是も質  
 屋へ飛すの。ヤイ治兵衛女房子共の身の皮はぎ。其金でおやま狂ひ活胴拘賊め女房共の  
 伯母甥なれど此五左衛門といあの他人。損とせふ好味がない孫右衛門に斷り兄が方ら  
 取返す。サア去状くくと七重の扉八重の鎖。百重の圍み通るゝ共通れ方なき手詰の段  
 。ナ、治兵衛が去状筆で書ぬ是御覽せ。おさんさらばと脇差に手とくくる。縋り付てな  
 ぶ悲しや。爺様身に誤まり有ればこそ段上の詫言。あんまり利運過ました。治兵衛殿ころ

他人なれ子供孫可愛ふの御座らぬ。わしや去状の受取ぬと。良人に抱付聲と上泣叫ぶて  
 と道理なれ。よいく去状いらぬ女郎こいと引立る。いや私や往のぬ厭も厭れもせぬ中  
 何の恨に晝日中。夫婦の恥の晒ぬと泣詫れ共聞入す。此上に何の恥町内一杯喚いて行と。  
 引立れば振放し小腕とられ丁々と。蹠跟足の爪先に可愛や礎と行あたる。二人の子供が目  
 と覺し。大事の母様なせ伴て行祖父様め。今から誰と寝やうぞと慕ひ歎けば。ナ、最愛や  
 生れて一夜も母が肌と放さぬもの。晩のらひ爺様と寝しや二人の子供が朝ふさ前忘す。必  
 らすくは山吞せて下されなふ悲しやと。云ひ捨る跡に見捨る子と捨る。敷に夫婦の二股竹  
 永き別れと

下之卷

戀情爰と瀬にせん岬川。流るゝ水も行通ふ人も。音せぬ丑満の空十五夜の月湧て。光りの  
 暗き門行燈大和屋傳兵衛と一字書。眠り勝成る撃析に番太が足どり千鳥足。こよよくも  
 聲更たり。駕籠の衆いゝるふ更たのと上の町から下女子。迎ひの駕籠も大和屋の。潜り瓦落  
 くつゝと入。紀伊國屋の小春さん借やんしよ。迎ひとばりはの聞へ跡の三ッ四ッ接換

の程なく潜りによつと出。小春様の御泊じや駕籠の衆直に休ましやれ。ア、云ひ残した是花車さん。小春様に氣と付て下さんせ。太兵衛様へ身請がすんで金請取たりや預り物。酒過させて下んすなと。門の口より明日待ぬ治兵衛小春が土に成る。種蒔ちらして歸りける。茶屋の茶釜も夜一時休むは八ツと七ツとの間にちら付短薬の。光も細く更る夜の川風塞く霜みてり。また夜が深い送らせましよ。治兵衛様のね歸りじや小春様起しませ夫呼ませと亭主が聲。治兵衛潜りとぐわさと明け。コレ、傳兵衛小春に沙汰なし耳へ入ば夜明け迄括られる。夫故よふ寐させて援て往ぬる。日が出てあら起していなしや。我等今より歸ると直に買物の爲京へ登る。大分の用なれば中拂ひの間に合やうに歸るの不定。最前の金で其元の算用合も仕廻。河庄が所へも後の月見の拂と云ふて四ツ百五十匁請取とつて給らふしと。福嶋の西悦坊が佛檀買た奉加銀一枚回向しやれと遣つてたも。其外に懸り合ハア夫よ。磯市が花銀五ツ是斗じや仕舞て寤やれ。さらば、戻つて逢ふと。二足三足行より早く立歸り。脇差忘れたちやつと。なんと傳兵衛町人のこゝが心安い。武士なれば其儘切腹するであるの。我ら預て於てとんと失念小刀も揃ふたと。渡せば取つてしつゝ

と差。是さへあれば千人力もう休みやれと立歸る。追付お下り被成ませよふ御座りまも。そこ、に跡は樞械とごつとりと。物音もなく鎮まれり。治兵衛のつゝと去ぬる顔。又引のへす忍び足大和屋の戸に絶り。内と覗いて見る内に間近き人影嗅驚して。向ひの家の物影に過る間暫時身と忍ぶ。弟故に氣と碎く粉屋孫右衛門の先にたち。跡に丁兒の三五郎が脊中に翹の勘太郎伴れ。行燈目的に駈來り大和屋の戸と打叩。ちと物問ませふ紙屋治兵衛の居りませぬ。一寸逢せて下されと呼れば。扱ひ兄貴と治兵衛の身動きもせず猶忍ぶ。内より男の寝ばれ聲。治兵衛様のまちつと先に京へ登とてお歸り成れた爰にで御座らぬと。重て何の音信も涙はらく孫右衛門。歸らば道で逢なも京へとの合點がゆぬ。ア、氣遣ひで身が慄ふ小春と伴ての行ぬのと。胸にぎつくり横たゐる。心苦し堪へぬ。又戸と叩ば。夜更て誰じやもう寝ました。御無心ながらま一度お尋申たい。紀の國屋の小春殿にお歸り被成たのもし治兵衛と連立て行い成れぬ。ヤ、何じや小春殿の二階に寝てじや。ア先心が落付た心中の念のない何處に歸んで此苦どのける。一門一家親兄弟が片唾と呑で臆と揉といよも知るまい。鼠の恨に我身と忘れ無分別も出やうのと。異見の種に

勘太郎と連て尋ねる甲斐もなく。今迄逢ぬ何とほろく涙の一人言。隠る、間だの隔てねば聞へて治兵衛も息と詰。涙呑込斗りなり。ヤイ三五郎阿房めが夜るくうせる所外にい知らぬかど。云へば阿房の我名どと心得て。知つて居れと爰で恥の敷て云いぬ。知て居るといサア何處じや云て聞せ。聞た跡で叱らしやんな毎晩ちよこく行所の一側の納屋の下。大白痴め夫と誰が吟味する。サアこい裏町と尋て見ん勘太郎に風ひらすな。ごくにも立ぬ父めと持て可愛や冷たいめとするな。此冷たさで仕舞ば好がひよつと爰めに見まい。憎やくの底心の不便くの裏町といざ尋んと行過る。影隔たれば駈出て跡懐のしげに伸上り。心に物と云いせて十悪人の此治兵衛。死に次第共捨置れず跡のら跡まで御厄介勿体なやと。手と合せ伏拜みく。猶此上のお慈悲に子供がとと斗りにて暫時涙に咽びしが。兎ても覺悟と極しうへ小春や待んと。大和屋の潜りの透間さし覗けば。内にちら付人蔭の。小春じやないの待としらせの合圖の咳。エヘンくくのつちくエヘンに柏子木打ませて。上の町から番太郎がくるくたぐる風の夜の。せきく廻る火用心ごよぐくくも。人忍ぶ我に辛き葛城の。神隠れして遣り過し透と鏡ひ立寄ば。潜

り内から密と明く。小春の。待てる治兵衛様早ふ出たいと氣と急ば。せく程廻る車戸の明ると人や聞付んと。しやくつてあくればしやくつて響き。耳に轟く胸の中治兵衛が外から手と添ても。心震ひに手先も震ひ。三分四分五分一寸の先の地獄の苦みより。鬼の見ぬ間と漸々に明て嬉しき年の朝。小春の内と抜出て互ひに手と手と取りし。北へ行くの南へる西の東の行末も。心の早瀬岬川流る、月に逆らひて足とはるりに

名ごりの橋づくし

走り書。謠の本の近衛流野郎帽子の若紫。悪所狂ひの身の果の斯なり行と定まりし釋迦の教も有との。見たし愛身の因果經。明日の世上の言草に紙屋治兵衛が心中と。仇名散り行櫻木に。根彫葉ぼりと繪双紙の版摺紙の其中に有共しらぬ死神に。誘われ行も商賣に疎き報と觀念も。とすれば心ひのされて歩行惱む道理なり。頃十月十五夜の月にも見ぬ身の上。心の闇の験のや。今置霜の明日消る果敢なき譬の夫よりも。先へ消行閨の中最愛可愛と締て寝し移香も何と流の岬川。西に見て朝夕渡る此橋の天神橋の其昔。菅相丞と申せし時筑紫へ流罪給ひしに。君と慕ひて太宰府へたつた一飛梅田橋。跡老松の縁橋の

別れと歎き悲みて跡も憶る、櫻橋。今に咄しと聞渡る一首の歌の御威徳。あゝる尊き荒神の氏子と生れし身と持て。其方も殺し我も死ぬ元へと問へば分別の。あの可憐な貝殻に一杯もなき蜆橋。短なき物の我々が此世の住居秋の日よ。十九と廿八年の今日の今宵と限りて。二人命の捨所爺と婆々との末迄も。まめで添いんと契りしに。九三年も馴染いで此災難に大江橋。あれみや浪花小橋の舟入橋の濱傳ひ。是迄来れば来る程の冥途の道が近付と。歎けば女も絶り寄りも此道が冥途のと。見おのす顔も見へぬ程落る泪に堀川の橋も水にや浸るらん。北へ歩行ば我宿と一目に見るも見歸らず。子供の行衛女房の哀れも胸に押包み。南へ渡る橋柱数も限らぬ家と。いかに名付て八軒家。誰と伏見の下り舟着ぬうちにと道急ぐ。此世と捨て行身にも聞も恐し天満橋。淀と大和の二川と一ッ流の大川や。水と魚とい伴て行我も小春と二人連。一ッ刃の三ッ瀬川手向の水に受たやな。何の歎のん此世でこそは添す共。未來の云ふに及す今度のく。つゝと今度の其先の世迄も夫婦ぞや。一ッ蓮の頼みに一夏に一部夏書せし。大慈大悲の普門品妙法蓮華京橋と。越れば到る彼岸の玉の臺に乗へて。佛の姿に身となり橋乘生濟度が儘ならば。流の人の此後の絶て心

中せぬやうに。守りたいぞと及びなき願ひも世上の世迷言。思ひやられて哀れなり。野田の入江の水煙り山の端白くはのく。あれ寺の鐘の聲こうく斯していつ迄の。とても存命はてぬ身と最期急ん此方へと。手に百八の珠の緒と泪の玉に線ませて。南無阿彌島の大長寺殿の外面のいさゝ川。流れ漲る樋の上と最期所と着にける。なふ何時迄うのく歩行ても。爰ぞ人の死に場とて定まりし所もなし。いさ爰と往生場と手と取土に坐しければ。さればこそ死に場何處も同じと云ながら。私しが道々思ふにも二人が死に顔並べ。小春と紙屋治兵衛と心中と沙汰あらば。おさん様より頼みにて殺して呉るな殺すまい挨拶切と取替せし其文と反古にし。大事の男と唆しての心中の流石一坐流の勤めの者義理しらす偽り者と。世の人千人万人よりおさん様一人の下見。恨み嫉みも嘸と思ひ遣り。未來の迷ひは一ッ。私しと此處で殺してこなさん何處ぞ所へのついと脇でと。うち靠れ口説ば俱に口説泣。愚痴なと斗りおさんの眞に取りのやされ。暇と遣れば他人と他人。離別の女になんの義理道すがら云ふ通り。今度のくすんと今度の先の世迄も夫婦と契る此二人。執と並べ死るに誰が譏り誰が嫉む。サア其離別の誰が所爲私しよりこなさん猶愚



痴な。身體があの世へ伴立の所々の死にとして譬へ此身體の驚鳥にのつゝられても。二人の魂を付纏わり地獄へも極樂へも連立て下さんせと。又伏沈み泣ければ。ナ、夫よく此身體の地水火風死れば空に歸る。五生七生朽せぬ夫婦の魂放れぬ驗合點と。脇差すばと扱はなし元結際より我黒髪ふつゝと切て。是見や小春此髪の有内は紙屋治兵衛と云ふおさんが良人。髪切つたれば出家の身。三界の家と出妻子珍寶不隨者の法師。おさんと云ふ女房なければおぬしが立る義理もなしと。泪ながら投出す。ア、嬉しふござんすと小春も脇差取上げ洗ひつ漉つ撫付し。酷や惜げも投島田はらりと切て投捨る。枯野の芒夜半の霜俱に亂るゝ哀れさよ。浮世と逃れし尼法師夫婦の義理とは俗の昔。迎ものとはさつぱりと死傷も替て山と川。此繩の上と山と准らへ和女が最期場。我の又此流れにて縊る最期の同じ時ながら。捨身の品も所も替ておさんに立援く心の道。其抱帯此方へと。若紫の色も香も無常の風に縮緬の此世彼の世の二重まはり。繩の俎木にしつゝと括り先と結んで。狩場の雉子の妻故我も首締纏る良結。我と我身の死拵へ見るに目も呉心くれ。こなさん夫で死なしやんすの所と隔て死ぬれば側に居るも少しの間。此處へくと手と取合刃で死ぬるは一

思ひ嘸苦痛なされうと。思へば最愛くと止めぬたる忍び泣。首くゝるも喉突も死ぬるに愚のの有物の。よしない事に氣とふれ最期の念と亂さず共。西へくと行月と如來と拜み目と放さず。只西方と忘りやるな心残り事有は云ふて死にや。何も無いとこなさん定てお二人の子達の事が氣にのゝる。アレ瓢な事云ひ出して又泣しやる。父親が今死ぬる共何心なくすやくと。可愛や寝顔見るやうな忘れぬは是はつゝのりと岸波と伏て泣しづむ。聲も争とふ群鳥。柵はなれて鳴聲の。今の哀れと問ふやとていと涙と添にける。なふあれと聞や二人と冥途へ迎ひの鳥。午王の裏に誓紙一枚書度。熊野の鳥がお山にて三羽づゝ死ぬると。昔より言傳しが我と其方が新玉の歳の始に起請の書初め。月の始月頭書し誓紙の数々其度事に。三羽宛殺せし鳥の許多ぞや。常に可愛くと聞今宵の耳へ其殺生の恨の罪。むくひくと聞ゆるぞや報ひと誰故ぞ我もる辛き死ととぐる。免て吳と抱き寄れば。いや私故と締寄て顔と顔ととうち重ね。泪に閉る鬢の髪野邊の嵐に氷けり。後に響く大長寺の鐘の聲南無三寶長き夜も。夫婦が命短の夜と早明渡る晨鐘に最期の今ぞと引寄て。跡迄残る死顔に泣顔残すな残さじと。莞爾笑顔のしろくと霜に凍て手も慄ひ。

我のら先に目も眩み刃の立ども泣涙。ア、急まいく早ふくと女が勇むと力草。風勝ひ  
 来る念佛の我に勤むる南無阿彌陀佛。彌陀の利劍とぐつと刺され引居ても反返り。七類八  
 倒このいゝに切先咽喉と外れ。死にもやらざる最期の業苦俱に亂れて苦みの。氣と取直し  
 引寄て鏢元迄差通したる一刀。刺り苦しさ曉の見果ぬ夢と消果たり。頭北面西右脇臥に  
 羽織打着せ死骸と繕ひ。泣て盡せぬ名残の袂見捨て抱帯と手操寄せ。首に畏と引掛る寺の  
 念佛も切回向。有縁無縁乃至法界平等の聲と限りに極の上より。一蓮托生南無阿彌陀佛と  
 陥いづし暫時苦し生瓢。風に揺るゝ如くにて次第お絶る呼吸の道。いさせきとむる樋の口  
 に。此世の縁の切果たり。朝出の漁夫が網の目に見付て死んだヤレ死んだ。出逢くと聲  
 くに言廣めたる物語。直に成佛得脱の誓ひの網島心中と目ごととに涙とけけにけり

天の網島終

源氏烏帽子折

近松門左衛門作

けう風ゆるく吹てとうじつおごそのに輝やき。春雨なゝめに酒いでせいゑん花と粧ひす。  
 今此時のや四ツの夷八ツの隅春も閑に立浪の。後白河の法皇こそ別て目出度き賢王なれ。  
 天津御國と二條の院に譲り與へたのしまし。玉体安く仙洞に遁れふりさせ給ひながら万機  
 と後見政事聞へさせ給へば。道ある御代と百敷や。袂豊に初ぎしき治る國の兆なる。既に  
 平治二年正月七日。武臣安藝守平の清盛院參し。先新春の御慶と奏し。別て當年の目出度  
 き事のみ候べき。御喜悅の表し御座候。其故の源氏の大將左馬頭義朝藤原の信頼に與し。  
 天下と傾けんと爲し所に。舊冬清盛待賢門の戦に打勝。義朝の野間の内海長田と頼み罷下  
 り候所に。長田譜代の下人なれども勅命と重んじ。當月三日に終に義朝並に聳の鎌田と討  
 取候段。神妙に存じ長田の庄司忠致。同じく太郎忠澄召連れ參上仕る。義朝が首の穢と憚  
 り。源氏重代の太刀物具白旗と切取て。是清盛が御年玉國安全に治るも。一張の弓の勢ひ  
 たり。東南西北の敵と易く平げん法皇大きに御感あり。清盛と中納言長田の六位の主將に

補せられ。重ての院宣に。義朝が事の先祖満仲より累代忠勤の功篤しと雖も。此度思はずも朝敵信頼に與し。不覺の最期不便なり。内大臣の正二位と贈官し。朱雀の寺に標とたて追善有るべしとの御氣色にて。猶も長田と御階近く召れ。汝朕が命と重んずと雖も。正しく主人と智と討事天罰輕きにあらず。其罪と償はんには義朝が思ひ者。常盤の前と云ふ女。幼き子供有りと聞く。尋出し守育て切ての恩と報じなば。妻子と勞る志草の影なる義朝も。誓と忘れて自然汝が冥加と成べきぞと。漏る方なき院宣の惠の暇が伏屋迄。實に明王の盛徳に譬へて言ば。此春の民こそ御代の心なれ。つま木に取殘されて有ながら。憂の變らで常盤木の。浮世の力落葉ふる。下の醜態にしるよしして忘れ形見の涙の種。義朝公の御の三人の子になぐさみ、今若の九ツ乙若の六才扱牛若の三才にて。未乳離れぬ懷中に包む涙の世も狭く。宿も棒に埋れり。悼しや今若父の別れの涙の隙。竹馬取て打乗り。歎き給ふな母上様。追付某平家追討の院宣と蒙り。まづ此如く馬に乗り大軍を引卒し。父の敵清盛と討取の今の事。源氏の大將今若が武者振御覽候へと。庭の面と二三遍乘廻して立給へば。乙若小弓に小矢と矧赤き絹と細枝に掛け。彼ころ平家余さじとよつ引て兵と放

ち。嬉しや平家と射留しと勇み給へば牛若の。母の膝より這下りて彼赤絹と。すんく引ささ喰ささ兄弟三人打喜び。平家の赤旗討取たり。勝鬨揚よるい／＼かうと手と拍いてぞ笑ひる。此人々の二葉より斯成こそ道理なれ。成人の後六十余州と靡らせ源氏の光と輝のせし。右大將頼朝浦の冠者絶頼九郎判官義經と此兄弟の生先なり。常盤夢とも辨へずなふ恐しや壁に耳。弓手も馬手も平家方源氏の一家の皆亡び。有るに甲斐なき世の中に若も平家へ漏聞へ。如何なる愛さの重ぬべき。今日より左様の悪戯せばコレ。つめくするぞとたいじよだて牛若と搔抱さ。今若も乙若も今日は何とて手習せぬ。未だ手本のわけざるの早々寺への給へば。あつと答へて悄／＼と編笠被さ手と取交し。立出給ふ後姿常盤御前の見送りて。可憐の有様や頭の殿の在まして世が世ならば供人よ馬よ與よと云ふべきに。一僕とだに伴させぬ彼が源氏の物領の。成る果ると斗りにて。伏沈みてぞ歎る。然る所へ長田親子大勢引俱しとつと入り。夫こそ常盤余すなと牛若諸共引立る。常盤御前の聲と上げ長田とい己が事の。主と殺し婿と討つ非がく非道の罪人よ。汝の鬼蓄の木石の妾の命惜のらず。子供と助け得させよや。一ツの其身の祈禱ぞと前後不覺に泣給ふ。

長田打笑ひ。尤も帝より妻子の宥免との仰なれども。清盛公より根葉と枯せとの御意と蒙る。今若乙若と出せ。然なくば命と取ぞといふ。己が心に引當て卑しくも云たりな。自己も牛若も殺さば殺せ。今若や乙若が行衛の言じと叫ばるれど聞入もせず擲め行く。神や佛も無きよのと淺間しくこそ見へにけれ。是の扱置。爰に比企の藤九郎盛長とて源氏重代の勇士なりしが、去ぬる保元の合戦に父と討せ。幼少より流浪して北國に漂へしが。力強く背高く今年既に十九才。源氏亡ぬと聞くよりも夜と日に繼で都に上り。七條朱雀義朝の御墓所に参らる。向ふと見れば我年ばいなる若者の。直垂袴に太刀佩て編笠傾ふけ。盛長とじろくくと。熱視る。盛長不思議と能く視れば古への寺友達義朝の膝元去す澁谷の金丸幼顔疑ひなし。彼奴の義朝の御最期迄御供と聞さけるが。長田と討ずして逃來る卑怯者。詞とくるも無益なりと見ぬ顔して。御墓に花奉り水手向生たる人に云とく口惜き御有様や。人らしき侍が切て一人御供せば。斯く闊くとい成給ひじ。金玉とのや云ふ粕丁稚臆病者の腰抜の。人でなしと知り給はず頼みに召連れ給ふもへ。不覺の御最期是非もなしと堪忍ならぬ當言し。尻目に睨む眼より涙と流し申ける。金玉丸むつとせしが左

あらぬ体にて香花と捧げ。卒都婆に向つて口惜の御有様や。某が諫と御承引なく長田に心と許し給ひ。果敢なく討れ給ひしよな。當座に腹切て冥途の御供と存せしむとも。いやく死の易し存生へて今一度源氏の御代と翻し。御耻辱と雪んと斯の体への候へ共。若君達の御幼少。御家人ども散々に成り有る甲斐もなき藤九郎盛長と云ふ素丁稚。浪人して魂くたり。口先の廣言斗りにて臆病者の大腰抜。何の役にも立申さず源氏の御運の拙さよと。同じく尻目に睨付く詞と荒し申けり。盛長又御墓に向ひ。石塔に耳なく卒都婆物言ねばとて。振ぬ太刀の高名腕なしのふりずんばい。草の影にて左ころ可笑しく覺されん。死と易しと申せども命と捨る程ならば。長田奴に羽のあらじ。討に討れぬ事や有る。然ながら武士と思へば恨みも有る。牛馬に劣りたる人外と思し召せ。本意の某遂げ申さん未來の忘執晴れ給へ。南無阿彌陀佛と云ひければ。金玉又御墓に向ひ。玉子の中にも巢もり有る尤もなく。親兄弟の兵に似たる方なきそんはづれ。夫程心剛ならば。去ぬる合戦に今の口はどな高名のせざりしぞ。合戦と言ば逃足早く。爭論過ての棒ちぎり木後の廣言腹の皮。逃吠の犬侍臆病くくとぞ笑ひける。盛長今の堪へ兼犬侍とい誰が事ぞ。

金玉聞きも敢ず。又最前より其方が人外とい誰が事ぞ。テ、澁谷の金玉が事よ。テ、犬侍とい御分盛長が事よ。盛長腹に据ゑね。侍と捉へて犬侍とい如何に今一言云ふて見よと太刀に手とつけ言ければ。ヤ侍とい人がまし。無益の太刀と扱んより犬に似合た尾と振れと云ふヤ侍。おのれ侍ならばなど主の敵長田の討ぬ五穀つぶしの娑婆塞げ。未と大事に思はずばれのれと爰で死ぬべきに。命が二ツ欲しいな。テ、我も源氏の御末と貢ぐ者の有るならば。御分と爰で死ぬべきに。命がも一ツ欲しいな。ヤ、悴め美事我と死ぬべきの。テ、死にのねふの、ヤ、討のねふの。誰と已奴めと。討たいな切たいな。無念さよ口惜やと。兩方りきむ居合腰太刀の柄も摧けよと。搦りひしぎ身と慄し。互の心探りあひ兩眼に血筋とはり。齒と鳴して睨み合擬勢の程を頼もしき。盛長のうらくと笑ひ。テ、言甲斐なき狼狽者と死して益なし。名將の御墓と腰抜共に回向させ。勿体なしと云ふ儘に一丈有余の高卒都婆押取て出ければ金玉續いて飛掛り。君の標の渡さじと確と取て引留る。日本中古兵揃に選れて大力と名にふれし。藤九郎盛長博多王の怒となせば。源平の其中に剛力の聞有。澁谷の金玉昌俊獅子王の力と出し。ゑいやくと捨あへば腕骨膝骨腰の骨。つがいくの唐紅血ばしつ

て節あがり。額の筋の脛へ下り脛の筋の頭へ上り。五百五十の力瘤九重の藤葛。松とあらんで苦むせる巖に生し如くにて。二人踏たる足の下土五六寸窪ほみ入り左手もぢり右手違ひうんと云ふて捨ければ。四方八寸の角卒都婆中よりふつと捨切て小踊してばつと退き。雙方睨んで立たる人人間業とい見へざりけり。暫時詞もなかりしが一度に涙とはらくと流し。テ、頼母しし金玉丸。心底現れたり嬉し。疑ひし口惜さよ。許してくれよと言ければ。そちが心も見届たり頼母し。最前の雑言も忠節の余り。許せ。此上の心と合せ平家と亡し。頭の殿の鬱憤と休め申さんが。思へば拙き源氏の御運口惜くの思のぬる無念に思のすや口惜や無念やと。卒都婆投捨直と寄り袖とくに縫り付。怒れる顔面引のへて悲嘆の涙の堰あへぬ。眞の姿を哀れなる。然る所に六波羅の方より雜式整固邊と除ひ。囚人なりと罵り來る人々木影に立隠れ。能く見ればこの如何に常盤御前に牛若抱のせ。敷草に引据へ武士四方と取廻し。長田の太郎の太刀取にて瀬尾の七郎檢視と見へて。コレく常盤最早最後の極つたり。去ながら清盛公の御心に從ひ給ひ。三人の若と助け御身の望も叶ふべし。一生の思案所いらくと言れば。常盤涙の隙よりも。ヤ、自らの女な

れども義朝の妻なるぞ。狼狽事ばし言ずとも早く首打て。彼長田めに喰付て本望と達せんと。艶に氣高き外皆にてはつたと睨み。はらくと涙の玉と貫けり今のは是非なし首打て長田承るも慄ひ聲。膝わなくと後に廻り。太刀振上んとせし所と盛長金王飛で出。長田が胸板蹴倒し主君の冥罰思ひ知れと。首掻落せば懲固ども狼籍者と立騒ぐ。鎗長刀と追取々々朱雀の野邊の草の原。露と亂して切結び切解さ追ひすび。數十人に手と負せ八方へ追散し立返つて。さあ／＼常盤御前の子供と俱し大和路へ落給へ。日本國の平家方此金王の姿と變へ。土佐坊昌俊と名乗密に勢と集むべし。出來た／＼某の關東へ馳下り武藏相摸伊豆駿河上野下野安房上總。源氏譜代の兵どもそれにも叶すば。八丈大島蝦夷松前鬼が島へ押渡り。猛虎猛威の鬼と集て軍勢とし平家と易く亡さん。尤々と約束堅き石塔に暇申て立歸る。風神雷神厄神も取ひしぐべき威勢の。鍾旭大臣獅子王の暴たる姿も斯くやらん

第二

前の安藝守清盛の御前に。嫡子重盛宗盛と始め一門残らず伺候有り。未だ源氏の末類ども方々に忍び居て。常盤親子と奪ひ行き。剩さへ長田の太郎と討取る事。如何なる大事の仕出さんと評誑眉とぞ擧るる時に重盛申さるゝ。たとへ源氏の末類神にもせよ。大將義朝と亡す上の日影者ども寄集り。たやすく平家と亡す事及びがたし。されば易に曰く。亢龍悔有り滿れば欠く。此殘黨と討れん事事と好むに似て候。只義朝が三人の子供と密に捜し出されて。流罪せらるゝ迄に候と穩便に宣へども。清盛怒甚だしく常盤の前の子なり子供幼少遠くの往じと離波妹尾と大將にて。三百余騎の追手と方々へこそ差向らる。扱又彌平兵衛宗清に仰付。不思議の者と擲捕と在々郷々町小路。殘なく觸ければ當時平家の威勢に靡く草葉の影にだに隠るゝ方

常盤御前道行

頃の正月の末つゝた春めきながら牙のへり。袂の氷柱とき知らぬ常盤御前の常盤木の木の下闇に踏迷ふ。夜深き空や世にあらば今ぞ妹脊の寝入ばな。今朝のつれなくひく起に。抱き懸して牛若の夢とば母が懐に。泣寝入せし可愛さよ。今若のおとなしく。吾妻のらげに脚絆締め乙若の手と引て。先に立たる歩みふり。小太刀佩たる腰付も。宛ら父の御影のと

源氏鳥帽子折

十

涙に涙果しなく。しのびつけたる顔くせや。最と傾ふく笠の雪。打拂ひつゝ見渡せば。賤が門田に鶯摘む。東寺よつ塚鳥羽繩手。諸國の秋と積のせて。御世の眞の牛車京の名残に。蕪のば我が心も打乗せて送れ見送れ呼返せ。返らぬ水の泡沫お初歌謠ふ初蛙。梅に年とる鶯の翼は雪に疊まれて。また片言の初音鳴く。そのがさまと春なれや。人の姿も若緑。竹田の里に来て見れば。蒿屋が軒も飾繩はなが樸。ゑぼしにわけて門松のげの小鼓や。ありけう有ける新玉の年も若やぐ巨より。水と和ぐ柳の芽む。里も榮へまします。万歳鳥追とりぐに春の賑ふ。折のらの厄神參厄除。參る氏子の二ツ三ツまた一ツ身の縫わけに。蘇民將來子孫繁昌神堅られと。石の華居の二柱二人の親の家土や。小弓に添し八幡山道すがらの參詣と。今若の御覽じて是ぞ源氏の氏神に我門出の吉相と御手と合せ給ひければ。兄と見まぬに乙若も牛若も。母君の乳房の上に手と合せ。さそうくと愛らしさ父義朝のましまさば。如何に悦び給ひなん。類なき若共と母が袂の下にのみ埋木となすべきのと。昔と慕ひ行末と思へば盡ぬ愛涙。我身一つの雨ぞのし。古へ人の浮名たつ。戀の百夜の深草山あまざる。雪に雲暗くまた朝明の心地して。三里に足ぬ玉鉾も草鞋凍り足こへ。

雪にもおなじ墨染の櫻の寺の晩鐘に。宿のなけれと里の名の。伏見に行くれ給ひけり。降る雪の音聞く程に静なる。竹よりとくの一ッ庵猫の通路跡付し。唯一筋の道細く。油火はのりに播立て女の業のしとけなき。引さき紙と結びつき。半上たる伊豫藤原を雪ともて來る。常盤御前の灯火の影と便りに尋寄り。大和へ下る女なるが。幼き者と召具して雪に道と失ふたり。一夜の情と有ければ。十八九なる女房の紙燭のへげて椽に出。親子の人とつくくと打まもり。悼しの有様やお宿申たうの候へとも。此比平家の沙汰として義朝の所縁とつよく詮議の候が。人々の有様咎めんの必定なり。自の白妙とて藤九郎盛長が妹。源氏譜代の者なれども。不思議の縁にて平家の侍。彌平兵衛宗清の忍び妻になり候。今にも夫の宗清殿來り給は。愛目とこそ見給はん情なしとな思召そよ。妾がつらさの尤愛さへ。何國へなりとも落給へと。いと念比の詞の色紙燭吹消し入にけり。常盤も今の頼みされ。力も落て先へも行れず。後へとて戻られず。とても此上の運に任せて兎も角も。今宵は爰に明さんと少し風避軒蔭に。小袖の襦のうらがへと敷寝の床と片敷せ。笠と并べて屏風とし昔の翠帳紅閨に。隙間の風も寒のりし身のならいしと身と捨て。兄弟に降る雪と

打拂ひく。隣吊ふ小夜千鳥。泣て其夜と更さる。間なく隙なく心なく。雪は溢すが如くにて。寒風颯々として烈しくて。人の肌骨に染渡り肌と刺す事鋭さ刃の如くなり。悼しや母上は勞れたる身と寒氣に破られ。悪寒五体と苦むれば。堪がたやと伏轉ひ前後不覺に見へ給ふ。今若乙若驚き嗚如何にせん悲しやと。額と押へ手と按りいかに乙若母上の寒あらんに。物着せません尤と兄弟帯解き身狭なる。小袖と脱で母上の裾や枕み取重ね打重ね。我は厭はで埋もる。雪の裸身衰れなり。母は苦き枕と上げ。叔悼しの子供やな。斯ばあり母と大切にいかに孝行なればとて。和御前達と凍へさせ。親も冥加に盡るどとよ。子は息才に生立て見するぞ深き孝行なれ。風邪はし引な衣着よと着すれば脱で母に着せ。いや我々は寒あらず。侍のならひには如何なる雪にも戦して。能き敵と組ん時寒し冷たしなんどとて。敵に背と見すべさる。寒いと云ふな乙若よ。寒いと覺すな兄上と甲斐くしげにいふ聲に。牛若目醒し這出て見ると見真似に衣と脱ぎ。同く母に着せまいらせ。手足も慄ひ凍ゆれと其色見せず齒切し。拳と握り耐ゆる体母は氣も絶へ目も眩み。情なや淺間しや百万余騎の大將軍とも仰るべき若共に。一重の衣と着せぬるは如何なる神の咎ぞ

や。可憐の人達や御身達が。志綾錦より厚ければ母は着ねども温なり。不便の者よこち寄れと三人一所に搔寄せて。抱き伏して泣給ふ道理とこそ聞へけれ。月も夜半に更行ば彌平兵衛宗清。女の庵に忍びしが雪に映るふ人影は。何者の怪しやと傘のさし能見れば。常盤親子に紛ひなし。綱代の魚ごさんなれ餘さじと身づくろひ。猶も事と窺ふにぞ慈母の哀憐孝子の振舞。流石源氏の根ざしなり悼しよ憐さよ。今人々と助けしとて。源氏の運の未ならば終には捜し出さるべし。假令擲捕たりとて。盡んず平家の御果報の長久にもよもならじ。情知ぬは匹夫のよう殊に我妻の爲には主君なり。彼是助けて落さんと思ひしがいや待て暫し。主君清盛の御眼鏡と以て仰と蒙むり。助けては道立す擲捕ては情なしとどつゝ舞の思案して。左わらぬ体にて戸と叩けば。女房待のね柴の戸の雪打拂ひ。草鞋もどくく庵へ伴ひける。今宵は殊なふ冷さふらふ先盃と温めて。暫く差つ差れしが女房申けるは。なふ宗清殿。自は源氏御身様は平家。若只今にも義朝の所縁とならば。如何し給はんと他ながらこる裏問けれ。宗清扱ころと思ひ。云ふまでもなし。主君清盛の仰なれば。如何に汝が主なるとて用捨はならず。眼に懸らば擲捕て六波羅殿へ引立る。只何



事も見ぬが佛聞ぬが花と答へまが。親子の人々物ごしの手に取る様に聞へしと。女房はつと思ふ顔。宗清氣とつけやれ小鳥共の軒に宿りて驚しきに。あれ追拂へと云ひければ。なふ情なやふくら雀の羽と惱み。雪に折れ伏す篠竹の笹に一夜の假の宿。左のみに太くなの給ひそ。はや夜も更ぬ床寒し音せでお寝れと勸めける。いや〜某は殺生好。鳥の聲と聞ば捕ではおろす。是非追拂へと云ひければ。女房更に合點せず夜なく泊る小鳥なれば。追ても打てもたぬといふ。宗清しんきと沸し。不合點な。いで某が追退んと弓矢取て駈出る。女房は人々の影隠さんと引留る。振放し突退て空矢四五本差詰め〜射る音に。常盤驚き兄弟と前後に掻抱き。はふ〜遁退き給ひける。宗清驚き見送りて。あれ見よ女房雀共が遁つるは。其儘置て某が殺生し。あの雀と殺させて汝が忠節立べきの。只何事も見ぬが佛聞ぬが花今合點いたると云は。女房左右の事もなく。あら頼母しやと斗にて袂に縫り歎きしが。扱過分なる御心左右詞に及れず。連添ふ男に目がくれて。主殺と云れんも一門の名折なり。又おの様に逆ひても本望にも候はず。如何と案じ頼母しに有難き御了簡。斯斗深き御恩賞親にも子にも兄弟にも。七万寶の寶にも男一人は換ぬぞや。若君達も

常盤様も此恩忘れ給はじと。いへば〜暫く。常盤と云る名と聞ては。清盛公の御前にて某が誓文立す。いつ迄も雀々見ぬが佛聞ぬが花と。頼母合し弓取の妹脊のわけぞ頼母しき。藤九郎盛長は人々に行達しが宗清が放つ矢は妹が二心の不審と。庵に立ち事の様と聞届け。横手と打て涙とはら〜と流し。爰明け給へ宗清殿。是は白妙が兄源氏の郎等藤九郎盛長にて候。心底に依て妹と刺殺し。御邊と勝負と決せんため是迄は来りしが。只今の志生々世々に忘れがたし。一禮の爲對面せんと云は。宗清あら〜と笑ひ。又斑替の雀が來つて由なき事と囀るよな。某平家の扶持と蒙りながら。源氏方の禮と請此宗清が立べきの。狼狽たる羽抜鳥。左手も右手も狩人のおひ鳥狩の網高し。鷹に捕るな餌差にされな。古柵の難と飼育て初音揚よと云ければ。盛長悦び合點し。頼母し田面の雁。春は越路に立歸り源氏一味の友千鳥。大將軍の羽翼の下揚たる痕は白鷺や。群居る鳥の翼と鳴し會稽の巢立して。上見ぬ鷺の譽れと見せん尤々急げや急げ山鳥の尾の長尾の。長居は恐れお暇と夕告の鳥が啼く。吾妻路指して飛鳥の飛が如くに下りける。心は流石大鵬の千里一翔源氏の運。未たのもしうぞ聞へける。

第三

實や三百六十日曆々と巻盡し。既に承安三年と移る月日は程もなし。平家の驕奢日に榮へ清盛既に太政大臣と經て入道し淨海と法名ある。嫡子重盛内大臣。二男宗盛中納言右大將其外末子末葉殘らず稀有の官職。攝家華族に異らず。爰に三條烏丸烏帽子屋五郎太夫とて。烏帽子折の上手と召し。位々の烏帽子冠言付れば。則ち出來致せしと西八條に持參する。一門喜び着し給ひ御喜悅事終り。五郎太夫に祿給り清盛入道仰けるは。先年義朝が子供討て捨べりしと。池の禪尼の申に依て命と助け今若と。伊豆の國經が小島に流せしが。密に元服し右兵衛佐頼朝と名のり。當家追討の院宣と乞望む由風聞す。又弟牛若も成人し京近邊に忍び居て。院宣と望むと聞く然ば頼朝も牛若も法皇より。密に位と賜はり烏帽子冠求めんは必定なり。隨分氣と付見馴ぬ者烏帽子買んと云ならば。早速に注進せよと宣へば長田の庄司進み出。これ五郎太夫。荷の事ならず油斷なく詮策し某迄知されよ。此者共と注進せば御褒美に興り一代浮み上る事。長者になるぞ精出せ。何が扱く身の爲といひ。御奉公油斷は致さず候と。御請と申罷立宿所にこそは立歸れ。春の光と烏帽

子折五郎太夫が一人娘にしのもめて十五才。職人なれど烏帽子屋はお公家交はり上びたる。しよさいに連て氣もいたり都は戀の名所とて。自然なる伊達心町には惜き姿なり。今日は吉日商よし棚飾らせて賣物に。細工の仕初祝儀すぎ乳母下女と招き寄せ。春の遊びも今少し今日は羽子突遊ばんと。腰元呼て遣羽子や。彼方此方へつくばねの峯より落る瀧の白玉一二三よう舞ふ小羽子。外へさるゝなそれゆくな。羽子さへも袖に留りて情は。厚き羽子板の縁に似たる我中よ。夏瘦もせず蚊も喰ぬ年の數々面白や。住む甲斐もなき夜はつらし。牛若君十余年の霜雪と。鞍馬の山に踏分て十六歳になり給ふ。秀衡と頼み奥州へ下らんと覺せしが。童とあらば平家より搦め捕との沙汰さびし。元服して男になり下らばやと思召。都三條烏丸太夫が店に立寄りて烏帽子買ふ。なふ烏帽子買んと仰ける。女子共聞もあへず。飾りたる烏帽子の内何れの所望候ぞ。能も悪きも空價なし。望次第に召れよとしはも無く答ゆるにぞ。早しのめは牛若に曳れて廻る戀車。別なき思ひ色に出なふぎこつなの人々や。商賣といふ物は賣にも買にも品ぞ有。御用あらば妾にとちよこくとお傍に寄り。烏帽子は何が御所望ぞや御容色はよし風はよし。見る人我とや折烏帽子戀に意氣地

と立鳥帽子。此お姿に譚知ぬ我も心と懸鳥帽子と脊中ととんと現なや。しんさと斗言差て顔差入る襟深し。牛若君も色馴ぬ鞍馬の山の深山木の。花珍しくむづとれにくはつと赫らむ顔とあげ。誠に優しき詞の縁今日が情の初冠り。あはれ人目のすき額風折鳥帽子折もがなど手と取給へば。しの、めも魂も揉鳥帽子。懸緒の紐の双結び解ぬ思ひとなりけり。斯る所へ五郎太夫立歸り。こは何事と問ければ。娘は慌て、うろくと鳥帽子召れよ父上と太夫が頭に被のせて。狼狽廻る笑しさよ。太夫牛若と一目見てして遣たりと腹とも立す莞爾と笑ひ。よ、お若衆は鳥帽子が御望みの好はなきのと問ければ。牛若聞き給ひ扱は御亭主候な。此童が若よふずる鳥帽子は大鏑の頼と荒らの一くせみくせませ。ひなふたにあひとあらせくしがたといのくと。雙眉付て左折が所望と有る。太夫案に違ずと思ひながら。猶も試見んと思ひ。あら似合ぬ好事や。當代左折と召れふずる人は。一年野間の内海にて失給ひし左馬頭義朝の。其御子悪源太義平。二男朝長三男頼朝。扱は鞍馬におはします牛若殿とやらんこそ。左折は召れふずる平人は及びなし。但少人は由緒ばし候の牛若笑しく思召し。身には系圖の無れども若も咎むる人あらば。都の宿に古き鳥帽子の有つると

。所望して着したり。左折も右折も此冠者は知ぬなりと。ぬぎ捨て通るならば御身の難も有るまじ。童が科も脱るべし平に所望と仰ける。五郎太夫は仕濟たり牛若に紛ひなしと心の内に祝ひ。其義ならば出来合は候はず。今宵の内に折立させん一夜は是にと云ければ。いや只明日参らんと立出給ふと。しの、め袂と引留て父もお宿と申さる、こそ幸なれ。鳥帽子も折て御祝儀も取はやして参らせん。是非にとあれば牛若も情の糸に繋れて。岩木に有らぬ風情なり。太夫彌笑と含み。でういたしの、め年の始の商且那。随分御地走申せやと口には云て心には。たつた今擲捕牛若殺して牛のした。大判小判の擲取と山も見ぬ胸算用六波羅指てぞ急ぎける。いつの間には誰掛橋の思ひ川。早宵の間に深くなり。漏さぬ水は合惚の淵も磯とぞ契らる。其夜も深てしの、めは左折に小結とゆひ。御鳥帽子出来たり自は殿始。おの様は鳥帽子始目出度く闇にて御祝儀あれど。瓶子に盃取副て御前にこそ直しけれ。牛若御覽じ扱々嬉しき情の程。今は何と包み申さん。某は左馬頭義朝が八男牛若丸。平家と亡し源氏の代となし此思は報すべし。去とても代にあらば日本國の諸大名。祝ひの色となすべきに。口惜の次第やと御落涙ましませば。扱は左様に候の。

御悼しうころと斗にて共に袖とぞ絞りける。牛若重ねて我先祖義家は。八幡にて元服有り。八幡太郎と名のり給ふ。我も是と形取て烏帽子親は正八幡。鞍馬の大悲多門天。太刀と刀と八幡多門と觀念し。床の柱に立置て我と烏帽子と取て戴き。太刀の前にも三々九度刀の前にも三々九度。直に土器頂戴し。扱名は何と付べきぞ。九郎冠者源の義經と付申さん源氏の御代は千秋樂万歳樂と繰返し。獨言して語る、御有様こそあはれなれ

烏帽子折名づくし

しのめ情々見參らせ。御元服と祝はんと奥の一間につゝと入り。兼て用意や仕たりけん。數多の烏帽子掛に様々の烏帽子と着せ。色々の装束と打掛人の如くに拵へて御前に並べさせ。なふお目出度や關八州の諸大名御味方申さんとて。手勢くゝと引俱して御祝に參りたり。末繁昌の其兆御酒一ツとぞ祝ひける。牛若殆と御悦喜あり。實に珍しや面白や。頼もしや東路は源氏好の梓弓。取傳はりし武士の家名は如何にとの給へば。姫は烏帽子と打被き。是は伊豆國北條の四郎時政。一門榮へ類擴し。數ならねども某が御味方と申さんには。凡そ近國に残る武士は候まじ。手勢は限り知れずと謹んでこそ申けれ。次に座せしは梨

打烏帽子。直垂着流し太刀佩て。さも大様に見へしは如何に。さん候某の畠山のなにがし秩父の庄司重忠。若武者の昔より力業と好んで。大船と跳返し龍車と留むる勢有り。四相と悟る自然智は我さへ。卒や白露と玉と欺く謀。座乍ら万里の瀕と察し。戦はずして勝利と得。天地と動し鬼神と感せしむるなる。文武と雙の翼の臣。手勢合せて六万余騎御先手とぞ答へける。續いて并居し人々は。懸烏帽子に大紋の袖たぐゝと掻合せ。左も勇々しげに拵ひしこそ土肥の小山の梶原の。其名懐しとの給へば。抑是は宇多天皇の後胤佐々木の太郎。同姓次郎三郎盛綱。四郎高綱五郎吉清候なり。次に伺候す風折烏帽子。後高に着なしたる。本國家名はいのに。是こそ三浦の旗頭。和田の左衛門義盛年積つて六十六。軍に逢ふ事十五の度。一度も不覺の名ととらず。老木の枝は撓めども心の櫻華美に。榮へん君の御出世と千代万年と壽きて。九十三騎の一群ども召俱し參上仕る。末座に扣へし懸烏帽子。素襖袴に大太刀佩き。殊に勝れて見へたるは。是も三浦の一群ならめ。實に能御覽じ候ひし。我義盛が三男朝比奈の三郎義秀。色黒く手足あれ。蠶觸の荒男。茶の湯連歌は不得手なれども。朝比奈が癖として敵と見て勇む事。荒鷹が雉子と見て鳥屋

と潜るに異ならず。假令平家黒鉄の城と搦へ石門に籠るども。片手に捕て押破り。清盛父子と初とし撫斬胸斬拂ひ斬。將恭倒しに攻亡し。源氏の御代と爲し申さんと。辨舌によきみなくそれくくに答へしは。潔よくころ聞へけれ。爰も長田は五郎太夫が注進にて其小冠者何事のあらん。拔駈して討取んといさりきつて來りしが。障子の隙より遙に見れば。烏帽子直垂着流して大の男數十八。和田よ佐々木よ朝比奈よと云ふ聲に。長田の庄司はつと懦慄氣と失ひ。空恐しく胸慄足も腰もわなくと前後と忘する斗なり。太夫きつと見怯れ給ふる庄司殿。踏込で一討に遊ばせといへば。那と見よ鎌倉勢が雲霞の如し。此方が細工にならぬと云ふ。太夫驚き覗きて見れば案のとく兵數人列座せり。あつと言ふより慄出し。二人はひよろくうろくを慄ひて何の埒もなし。何處にての金王丸此由と聞出し。飛が如くに駐付案内まうと呼はつて二王立にぞ立たりける。長田味方と心得斷出て見れば金王なり。南無阿彌陀佛と地に俯伏穴へも入たき風情なり。太夫奥にうる付しと飛掛で確と捕れば。長田表へ逃んとす同く取て伏する間に。牛若姫諸共に奥より立出給ひける。太夫聲とあげ我等は何も科は無し。烏帽子が御用に候は、おまけ申さん。召ませひと慄ひく

言けると、某が烏帽子は。黒鉄の五枚兜鍬形うつて龍頭。鞆の付たる烏帽子が所望ぞ。已助くる者ならぬと娘が心と察し命斗は助ると。腰骨どうぞ踏おれば泣々のさり助りぬ。是長田。某は今法体し土佐坊昌俊と名乗るも。金王丸と言し時己奴と漏せし無念さに。其時の姿と殘し四十になる迄此前髪。今ころ落せ是見よと。附髮假髪と取しより土佐坊とこそなりにけれ。今殺すは可惜物關東へ連下り頼朝の御前にて。弄殺にすべしとて高手小手に擲付。扱源氏御出世今日の御祈禱に千秋万歳所繁昌。壹指舞ふ目出度やと。三番の烏帽子と着し袖と簪して、とととへてく。思ふ敵と取て押さへて源氏の御代より外へは遣じとぞ思ふと。若君と祝ひ參らせ。とうく東へ御下りおはしませ。扱某は都の様体聞つくるひ跡より追付奉らんと。勇に勇る有様は只樊噲も斯やらんと。恐れぬ者こそなのりけれ

第四

彌平兵衛宗清は。妻の白妙源氏の由縁有ゆへに。頼朝兄弟の命と助け參らせしが。其身平家の譜代なれば生中に事むづろし。源平別ち立迄の暫く身と退さ。世上と見んと去年の秋

より病氣といひて奉公ひき。養生の氣晴しとて夫婦共京近く。野山廻れば自然心淨る、瓢箪に。酒など入て腰に付觀音巡り寺社の椽。花の下影行暮る其所と其日の極樂と。物に搦ぬ身の樂は命も延る姿なり。斯る折のら十五六なる君達。しげ縫の大口に左折の小結着て。直垂の袖にて顔隠し忍ぶ振にて通りける。夫婦急度目くばせし直と寄て袖とひのへ。是申。御姿紛ふ所は候はず源氏の大将牛若殿と見掛たり。某は平家の兵彌平兵衛宗清。申へき子細あり名乗せ給へと小聲になつて言ければ。少人聞も敢ず、某ころ牛若よ。定めて我と探すらん今は脱るゝ所なし。はや首討て清盛に見せ。高名にせよと清しげにして居られけり。宗清手と拍園生に植ても紅の流石なる御舉動。全く君と討奉る心ならず。是なる者は我女房白妙と申て御家來藤九郎盛長が妹。其由縁に依て先年御幼少の時分。伏見の里にても御兄弟と見脱し助け奉りし。今とても某世間の稱も候へば。御味方こそ叶すともなぞや討取申へき。心易く落し申さんと云ば。少人聞き給ひ。然らば明て申べし我牛若にて更に無し。烏帽子折の五郎太夫が娘しのゝめと申す女なるが。親にて候五郎太夫慈に目くれ訴人せしと。澁谷の金王入道土佐坊の働きにて。若君も恙なく長田も生捕給ひしと

。父の太夫が弟妾が爲には伯父坊主。吉峯の雷玄法師重ねて平家へ訴へ。監物太郎頼方が手勢と以て。雷玄法師が加はり東路へ追手とくる由。妾は君が一夜の情。我牛若と名乗追手に出合討れなば。其隙に若君様一足なりとも落給はん。親伯父の悪心も妾が露の志と語りもあへず泣居たり。宗清夫婦感じ入其義ならば女房そちは此姫と同道にて。随分追付御供せよ。某は爰に残つて追手の大将監物太郎に出合。長話と仕のけ邪魔といれん。其間にはやゝ落せと言ければ。白妙悦び然らば妾も身と扮さんと。夫の羽織に編笠彼さ。しのゝめと先に立跡と慕ふて追駈る。案の如く追手の大将監物太郎手勢引具し走來る。宗清急度見これゝゝ。監物太郎頼方にてはなさの。遮しき体何處へ往ぞと言懸る。頼方願り。宗清の我は今日源の牛若が追手の役と蒙り。是なる訴人は烏帽子屋の五郎太夫が弟雷玄法師。則ち彼が案内にて只今急に追駈る。其方は病氣とて樂とする蒲山しと。言捨て駈出ると先待てと押留め。夫は近比太義千万。去ながら侍は息災にて奉公すること手柄なれ。随分ぼつらけ牛若と討留て御加増に預り給へ。幸酒と持わはせされば。門出視はん先一ツと腰の瓢箪取出せば。是は誠に氣がついたり然らばお辭儀申さぬと引受く。

我も三盃雷立も三盃御亭主も三盃。合せて三々くどうはお禮申さぬと又駈出ると。はて扱監物香齋するは手が悪し。此比久敷參會せず暫時は積る物語。今少とぞ引留る監物重ねて。時も時折も折大事の追手に行く者に。咄せんとは譯も無い爰と放せと引放す。はてさう堅う言な新しき咄あり。ちよつと咄さん聞けと言。監物少腹と立て。泣く子も目わけ咄所の。其方が様な隙ではなし重ねて聞くと逃てもく。いや咄掛つて話さでは置ぬぞと。捨合引合留ひれば監物殆ど持飽み。さあちやくくと咄さば咄せと。不肖顔にて聞居たる心意氣こそ笑しけれ。宗清どうと座とくみ是は大事の物語。夫なる御坊も軍兵達も聞給へ。武士たる者は後學と子細らしく聲作ひ。昔々或所に爺と姥と有けるに。爺は山へ柴刈に姥は川へ洗濯にと聞も果す。爰な者はあまり人と阿呆にする。酒に酔たう宗清相手になるな軍兵共。急げくと振切て跡とも見ずして走行く。宗清聲とあげ大事の咄残しおる先さきと聞け監物。猿の類は眞赤なと笑ひてこそは別れけれ。御曹子牛若は江州土山まで落延給ふ所へ。白妙しの、め追付て雷玄法師が訴人にて監物太郎追駈申と。宗清道にて長物語と仕出さん。其間に一足もはやくと言ければ。牛若實もと祝ひ宿と出放れ給ひしに。比し

も春の雪氷解て流れて田村川。水嵩増つて波早く越すべき様のあらざれば。よし此上は如何せん運は天に有明の月のよすがら爰にとて。田村の宮の拜殿に暫く休らひおはしける。監物太郎頼方は宗清が長話。由なき隙といれけると足とも付ず打ければ早土山に着けるが田村川の水高し此邊にこそ在つらめ。関さつて劫のし搜して討や者共と。十方に入亂れ関の聲とぞ揚にける。今は脱れぬ所ぞと。源の牛若九爰にありと駈出給へば白妙しの、め諸共に。弓手馬手に引添て面もふらず走向ふ。彼奴は兵術天狗の弟子殊に荷擔人有りけるぞ。侮つて負傷するなと八十余人の追手の勢群つて掛りしと。三人飛鳥の身も軽く飛越跳越踊越花と亂して戦ひける。女わらはと言ながら一人當千の剛の者。入るへく追立れば。平家の兵切立られ戦しらんで見へにけり。雷玄法師堪り兼牛若は免も角も。親伯父に逆ひたる女めこそ頼憎けれ。搦殺してくれんすと大手と擴げて駈廻る。しの、め長刀追取のべ。是伯父坊様衣の手前も有ぞのし一門の悪心と。教化ころせられずとも人の訴人は何事ぞ。一子出家すれば九族天に生ると言ふ。御身は引のへ六親と地獄に落す大惡僧。ア、結構な御出家。口惜くば寄て見よと長刀とひらめおせば。雷玄甚だ怒と爲し悪心却て大善根

。事も知で出家と悖く己こそ罪人よ。塞の河原の石こ詰と神前のくり石と。追取く飛礫打雨や霰と投のくる。しのめ長刀むねに爲し飛來る石と。はらりくはらりく切拂ひ。八方に打拂へば身には當らず飛返り。敵の眞向額口鼻筋首筋頭の鉢。さんくんに打割れわつと言てぞ逃散ける。白妙少換んと逃行く敵と追懸しに。頼方が郎等占部の新七取て返し渡合て切合しが。太刀と捨てむすと組む白妙莞爾と打笑ひ。女と思ひ侮るな盛長が妹宗清が妻なるぞ。主有る女に抱付はすこびたる徒者。生ては我が道立すと云より早く搔潜り襦取して跳返し。隙なく首と討たるは瞬きならぬ早業なり。討殘されたる兵共喚いて懸れば牛若丸。ものくし葉武者共一人も餘さじと。獅子奮迅虎亂入飛鳥の翔の手と摧き。隠れ現れ陽焰稻妻水の月手にもたまらず防る。雷立頼方左右より隙間なく攻ければ。華表ののさ木に飛上りあらりと打笑ひ。なふ追手の人々其方は大勢味方は僅三騎なり。暫休み申ぞと左り煽て在しける。頼方急つて煽けども爲べき様のあらざれば。遠矢に射取と打つがひ。よつ引てはたと射れば傍なる松にひらりと移る。二の矢と放せば心得たりと元の鳥居に飛戻り梢の猿の枝移り振舞蜘蛛の如くなり。雷立今は堪り兼愚僧が思案候

へば。鳥居も松も堀倒さんと土民の家なる蹴追取り。柱の根際に打立る牛若のさ木に雨足あけ。宙に下つて雷立が眞向としたゝのに切給へば。南無三方と逃て行く。續いて飛どり取て引据。御坊にくさい教なれども釋迦に經と言ふ事有り。生て恥と洒さんより牛若が引導にて。成佛せよと拜打頭よりひつしき迄左手右手へぞ捌ける。大將頼方怒と爲し。女わらはに是程迄切立られし口惜さよ。一騎も殘らず討死せよのれやのれと恥しめられ。むらくと寄懸る夫こそ望む所よと。又三人が引返し捲り立く息とも次せず追立れば四十余人薙伏て生殘る者迄も。半死半生叶じと田村川に飛入く。淨ぬ沈みぬ深ひける。牛若御覽じておゝ面白しく。人筏ごさんなれと三人手に手と取くみて。流るゝ武者の頭と踏。肩と踏へて。飛越く向ふの岸に駈上り。チ骨折く御辛勞。關東勢と引卒し重て一禮申べし。門出よし吉凶よし天氣もよし道もよし万世の中義經が。天下と治ん瑞相と悦び東に下らるゝ

第五

君が代は千代に八千代に榮へます。豊旗雲や伊豆の國峯が小島におはします。右兵衛の佐



頼朝は盛長一人配所の伽。密に平家追討の御企頻にて。關東の諸大名内々志と通じ参らすれば。頼朝武運も開くべき替める花の匂ひ有り。然る所に上方より澁谷の金王参上と申ける。頼朝悦び珍しや金王丸汝は法体しけるよな。法名は何と言ふとの給へば。さん候昌俊と申名乗字と其儘に土佐坊昌俊とついで候。して上方に別條なき。九郎は如何にと仰ければ。土佐坊承りされば候上方は平家の驕奢十分にて。こはるゝ水の源の君御出世と松の葉と万民祈り奉る。御舍弟九郎殿も御供致せし所に。幸なれば伊勢太神宮へ御参詣有るべき由。拙者は君への多土産に生着と持参致せし故。損せぬ内に一刻も早く御覽に入べき爲。先御先へ下つて候と申せば我君も盛長も。土産の肴は何ならん疾々とぞせめ給ふ。近比輕微の至りながら。のまの内海大綱にて取漏したる大悪魚。御賞斷遊ばせと長田の庄司と引出せば。頼朝大きに御悦喜あり。父義朝の命と取し北まぐらの毒の腹。今我爲には目出鯛く釣た所は心地よしと咄と哄さ給ひける。時刻移さず料理せよと御長刃と賜ければ。承ると土佐坊長刃取のべ小踊して。首ふつゝと播落し宙に上てちやうと受け。切先に貫き見参に入奉り。骸は島の水底にふし付にせよとて。下部に下し行はれ御悦び

は限りなし。此事北條へ聞へければ時政の北の方より女房達と使にて色々の絹八重がさね御祝儀に進上有。頼朝御覽じ時政夫婦の志返すくも嬉しさよと。若松摺たる小袖と肩に打のけおはしまし。鏡臺引寄せ我御顔。つゝと打視り。抑某清和天皇の臺と出。六孫王經基より満仲頼光に相續いて代々天下の權ととる。我其血脉と續べき人相尋常に變りてんこつの子れ有り。双の眉は八幡の八の字兩眼の人見には月日の光。頼の黒痣は風星木曜星。頭の辻には天照太神五体と守護しおはしまし。一度天下の將軍と仰るべき相現れたり。如何にくとの給へば土佐坊と初め使の女房若黨等。實も仰に違はじと一度に頭と傾ける。盛長は返答なく事笑しげに顔しめ。空嘘いたる其風情鏡に映れば頼朝氣色と損じ。後ぎたなし盛長只今の頼つきは。全く頼朝と侮つての振舞近比奇怪千万なり。左程頼みなき頼朝に仕へんより頼ある人に奉公せよ罷立との給へば盛長涙とはらりと流し。こは口惜き御誼や候末頼み有る主君とて御奉公仕ると。忠節と思召さるゝ頼なき主君と守立て。忠と勵こそ臣下の道とは申べけれ。然らば君の御心には頼みなき下人として見放し給はん恨しさよ。其御心ゆへにこそ源家の嫡流として。平家に世とせばめられ。悵憤き配所

の御住居中々末の御出世も覺束なふ覺へ候ぞや。口惜の御所存やと涙に烟び申ければ。君と初め人々も實忠臣の金言。心有ける諫やと皆感涙とぞ流しける。頼朝あく迄感じ給ひ此上は万事と止め。平家と亡す軍慮こそ肝要なれ。聞ば牛若は伊勢參宮したるよし。北條が侍共と驅催し汝は迎ひに登るべし。疾々との給へば。盛長仰と蒙りて御坂迎と聞へける

牛若宮めぐり

是は扱とさ御曹子牛若はしのゝめと誘ひ。さも美麗にて參宮有る御威勢こそは。勇々しけれよの。木綿垂ちらす神風や伊勢の宮立物ふりて。外宮の森はしんくくと神寂渡るたゝすまひ。昔覺へて安のなるこそ殊勝なれ。扱遷宮の御祭禮敷の奉幣事終り。是こそ伊弉諾伊弉册の尊御國讓と仕給ひし天照太神。事も愚や御本社は餘の御社に事變り。丸木柱に茅の屋根。供物は三杵きねが神樂と參らす。實古への木の丸殿と准へて。とらひ三じやくばうしきらすと聞へしと。宮遷し給ふこと民と憐み玉鉾の。道の道たる御惠世界國土と守らせ玉ふ。末社は八十末社なり。扱又外宮の御社は此神の第一わうじわひにわひとの太神宮。末社は四十末社なり。雨の宮風の宮風雨隨時の御空の雲井。月よみ日よみ國は豊に。

民榮へさせ給ひけるは誠に目出度候ひき。天の岩戸の暗き世も爰は蛭子の御社。御龜生の折柄に難陀が口より熱湯と出し。跋陀が口より温湯と出し。産湯とひらせ奉り。綾が千反錦が千反金襴童子の産着と召せ給ひしのも。三年足起給はねば。天の岩ぐす葦分の手ぐりぐりくく舟に乗せ奉り。青海原へ流し給ひて海と讓に請取給ひ。西の宮の惠美須御せん命長棹最も賢き釣針下し。あら目出鯛と釣く釣た姿のやれ扱しほらしや。此方は素盞の及びなき八雲立との御歌は。大きに和ぐ日の本の和歌の初の御神にて是ぞ祇園午頭天皇。扱又此方は藤原や天兒屋の春日の宮。弓手は八幡岩清水。斯程清しき御社と誰の熱田と名付けん。爰は住吉生玉や。稻荷は五穀の上賀茂や。又下賀茂に貴舟松の尾平野の神。北野に續く梅の宮。昔に變らぬ今宮も。大神宮と伏拜む五靈八社山王は廿一社ふさむろしに白鬚の神なみは。さらくくくくえいさらえい。さらくく颯と漣や漣や滋賀唐崎の御神は。是も八岐の蛇ぞと伊吹嵐にたがの神。鹿島香取諏訪三島戸隠神田の大明神。惣じて日本國中に一万七千余社の神。又きびの大じんは上には一まん下にはわは。三石の數々の祖神はこれ此御社。わうくくくくくくより。めいくれきくくくくくく。五

十鈴川に立浪の音も静に若が代と。千代万歳と守らせ給へと八拜九拜爲し給ふ。然る所へ  
 盛長は。關東勢と引具して御迎がてら參宮の望にて。夜と日に續で參りしとさゝめいて來  
 りける。牛若御喜悅ましくて。兩宮の御師と召し太々神樂と捧げらる。神も納受まし  
 くけんしやだんの屋根に三光現はれ。音樂噴噫の濁と清め。辰巳の方の神杉より源氏  
 の白旗雲となり光と添てたなびさける。人々あつと禮拜あれば旗雲の中よりも。伊勢岩清  
 水住吉の三社の御神ありくと現じ給ひ。神は神なり神人と離れず。誠と以てやどりとす  
 。神は人の尊敬に依て威とまし。人は神の恵に依て運と添ふ源氏の末は万々歳。五穀豐饒  
 民安全。國土豊に守るべしと彌陀釋迦觀音三体の。御本地と現し給へば牛若歡喜の思ひと  
 なし。百拜千拜幣帛と懸へす小忌衣。東の勢と催して怨敵と追伐し。源氏繁昌國繁昌治る  
 御代こそ久しけれ

源氏烏帽子折終

明治廿四年三月六日印刷  
 同年三月七日出版

◎(定價)◎  
 ◎(金七錢)◎  
 ◎(一)

發行者

早矢仕民治

神田區宮本町五番地

印刷者

松本秋齋

本郷區湯島壹丁目拾三番地

發兌元

丸善書店

日本橋通三丁目

全

武藏屋叢書閣

神田區宮本町五番地

賣捌書肆

神田南神保町	松江堂	神田區表神保町	中西屋	京都	大黒屋
神田浴集館内	黒雲堂	日本橋通一丁目	大倉書店	同	便利堂
神田表神保町	上田屋支店	本郷區元富士町	盛春堂	大坂	丸屋書店
京橋彌左衛門町	巖々堂	本郷四丁目	文壽堂	大坂	博聞分社
京橋尾張町	東海堂	神田錦町一丁目	武藏屋	神戸	久榮堂
芝南佐久間町	栗ぼら	横濱	丸屋書店		

○故近松門左衛門作淨瑠璃本既刊書目

一出世景清	貞享三年二月初興行	興行年月は聲曲類纂に依る	廿三年十一月再板
一天智天皇	元錄二年三月初興行		二十三年五月四板
一百日會	元錄三年三月初興行		廿三年十二月三板
源氏烏帽子折	元錄十年十月初興行		二十三年五月三板
蟬	元錄十二年正月初興行	* 此符號は合卷	二十四年三月出版
最明寺殿百人上臈	元錄十四年五月初興行	○ 此符號は合卷	二十三年十月出版
心中重井筒	寶永十六年三月初興行	◎ 此符號は合卷	廿三年十一月出版
傾城反魂香	寶永元年四月初興行	△ 此符號は合卷	二十三年十月再板
戀八卦柱曆	寶永二年八月初興行		再板近
今宮の心中	寶永三年九月初興行		廿三年十一月三板
吉野都女楠	寶永七年正月初興行	◎	廿三年十一月出版
國性爺合戰	正德元年九月初興行		二十三年十月再板
日本振袖始	正德二年七月初興行	△	二十四年一月出版
雙生隅田川	正德五年十二月初興行		二十三年八月再板
心中天の網島	享保三年二月初興行		二十三年五月再板
心中宵庚申	享保四年二月初興行		二十四年二月出版
	享保五年八月初興行		二十四年三月出版
	享保七年四月初興行		二十四年二月出版

一關八洲繫馬  
一伊達染手綱

享保九年正月初興行  
享保十七年六月初興行  
○但シ謄稿トアリ  
二十四年一月再板  
二十三年十月出版

○諸名家戯曲傑作

太平記	近松門左衛門添削	享保八年二月初興行	廿三年十二月出版
綱目	竹田出雲松田和吉		每冊定價八錢 郵税二錢
一心中二ッ腹帶	紀海音作	享保七年四月初興行	二十四年二月出版
一末廣十二段	紀海音作	合卷 元錄十五年八月初興行	二十四年二月出版

○浮世草子

一好色五人女	井原西鶴作	貞享三年開版	廿四年一月再版
一好色一代男	井原西鶴作	元和二年開版	廿四年二月出版

右之外古書類續々出版可仕候に付何卒御愛讀被下度候

發行所 神田宮本町五番地 叢書閣

故井原西鶴作

# 再版 好色五人女

全五卷 合本一冊

定價十二錢 郵税二錢

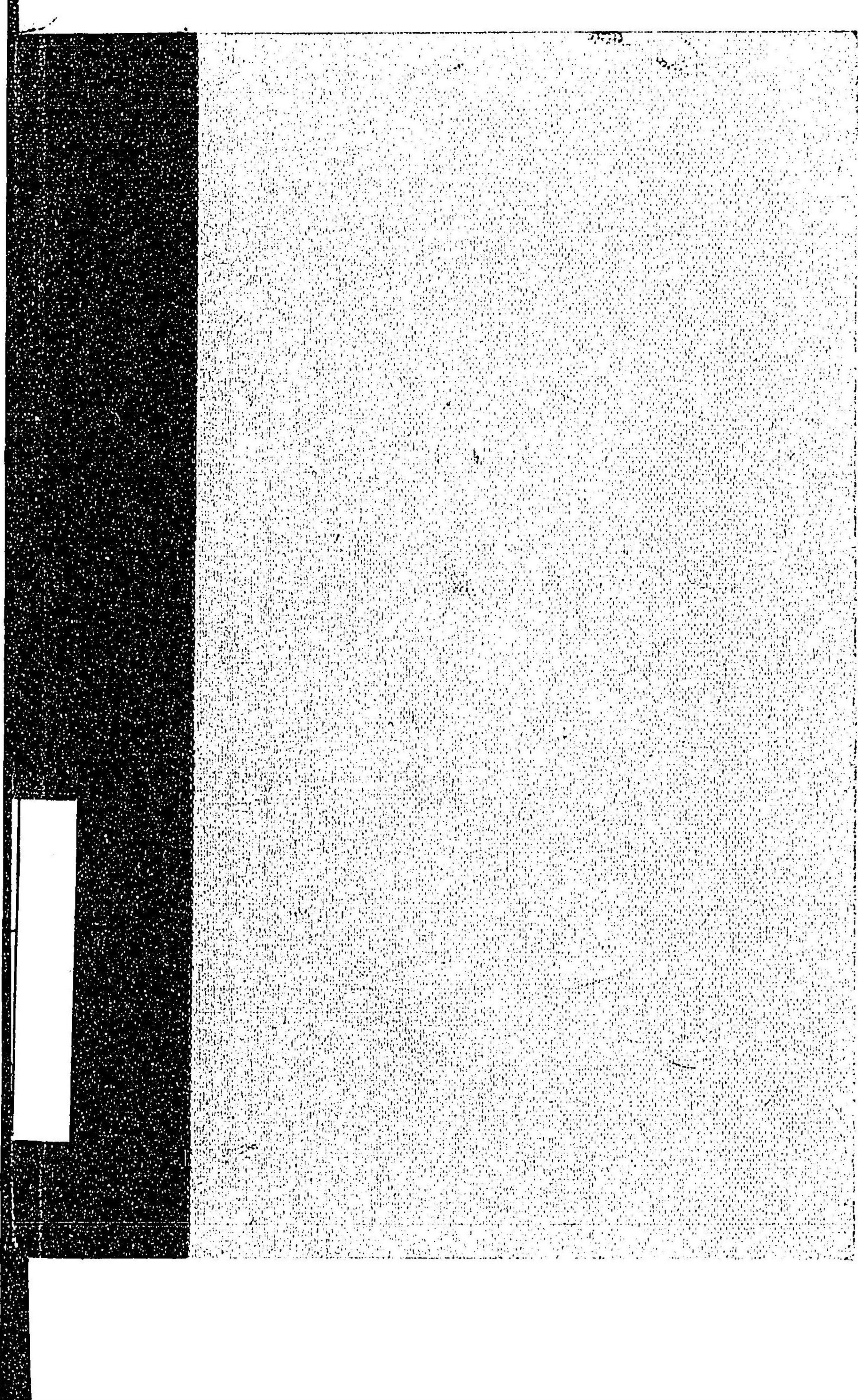
批評 「國會」 或る一部の小説家が六韜三略の巻ほかに有難がる西鶴翁の好色五人女は西洋紙活版摺に衣裳と改めて明治の世に再生せり原本にあらざれば硝子と隔て美人と物いひ交す心地すなご、云ふ人は兎もあれ未だ五人女に接せざる者は一たび之と讀んで其氣前と知るも可なり

「國民之友」 好色風の小説やうやく盛んならんとす今や西鶴の好色本續々翻刻せられんとす、小説家または批評家の中に西鶴と讚美して措る者出で來れり、彼は實に此れの結果なりとす、西鶴の想像は卑近なり其文字は亂雜なり、其取るべき所は實に眼のみ、然るに今や人々妄りに彼と讚歎するに雷同せんどす、本書の出版人分疏して曰く、「社會は常々人々作る」と、此語として眞箇の格言ならしめり、西鶴の今日に再生せる者豈亦故ならんや、豈また故ならんや

「東雲新聞」 井原西鶴の名久しく本函の底に埋もれて知る人もなきまでになり果しが近頃其の著ともて囃す者續々と現はれ明治の文學社會に此上なき名譽を得たるは西鶴の右に出るものなき程なり西鶴一代の著述數へ來ればなほ、多ある中に此著の如きは、その一代男、二代男、三代男、一代女、なんどと共一世と警破したるものといふべし此書紙質と擇び活字も鮮明にて一部の正價十二錢なり

「東京新報」 近松門左工門の著作全書と出版したる武藏屋と丸善書店に於て今度發賣したる故西鶴の好色五人女は此節元祿文學の流行に連れ其價も騰貴して古本ならば一部二三圓上にも上るべき珍本と僅十二錢にて一般讀者に頒つものなり

FK-25



912.4

Ti238s2

心中天の綱島  
源氏烏帽子折

国立国会図書館

088258-000-4

912.4-Ti238s2

心中天の綱島・源氏烏帽子折

近松 門左衛門/著

M24

DBI-0088

